

日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL.03-3503-2722 <http://www.jnpc.or.jp/>



安保法案 衆院通過

自民、公明両党などの賛成で安全保障関連法案を可決した衆院本会議=7月16日

撮影：藤掛 一成 (共同通信社写真部)

相次ぐ「三ヶ夕会見」 出席百人超 13回

山高きが故に貴からず。記者多きが故に貴からず。みかけだけで判断してはいけない。出席した記者が多いからといって、中身は別問題だ。それはわかっている。わかっているが、5、6、7月に出席者が100人を超える「三ヶ夕会見」は計13回と目白押しだった。日本記者クラブの役割のひとつである「ニュースの発信拠点」となったのではないか。

この間、最も多くの記者が集まったのは村山富市・元首相と河野洋平・元官房長官(6月9日、323人)。安保法制をめぐる違憲派学者の小林節、長谷部恭男の両氏(6月15日、209人)、合憲派の西修、百地章の両氏(6月19日、141人)が話題を呼んだ。沖繩関連も翁長雄志県知事(5月20日、238人)や沖繩2紙編集局長(7月2日、161人)が関心を集めた。東京五輪で森喜朗組織委員長(7月22日、236人)と遠藤利明担当相(7月24日、120人)は新国立競技場建設問題とタイミングが重なり注目された。

こうしたニュースに直接、連動した会見も、背景を探り長期的な見通しを聞く会見・研究会も、それぞれ大事にしたい。
(中井良則)

今月のことば
「バラエティー番組は価値破壊の最先端。差別反対の番組をつくるより、マッコ・テラックスを番組に出す方が効果的」
今野勉・テレビ演出家(7・16) 4ページ
「明治憲法は19世紀半ばの欧州スタンダード。自民党の憲法草案は近代法の拒否で慶安の御触書」
樋口陽一・東大名誉教授(7・27) 5ページ

クラブゲスト
「戦後70年総理談話について」声明
発表／森喜朗・東京オリンピック・パラ
リンピック組織委員長 3
行天豊雄・国際通貨研究所理事長／パ
ルバース・作家／今野勉・テレビ演出家 4
藤原作弥・元日銀副総裁／樋口陽一・
東大名誉教授／青木富貴子・ノンフィク
ション作家 5
アダムス・ヒューマン・ライツ・ウォッチ・アジア
局長／大西隆・豊橋技術科学大学長／
武富和彦・沖縄タイムス編集局長、潮平
芳和・琉球新報編集局長 6
維新の党 安保法案発表会見／堺屋
太一・アジア刑政財団会長／小林喜光・
経済同友会代表幹事 7
ナザルアハリ・駐日イラン大使／遠藤
利明・東京五輪担当相／森伸生・拓殖大
イスラーム研究所長 8
程永華・駐日中国大使 9

第13回海外取材団特集 10・13
ドイツ・イスラエルの戦後和解

戦後70年企画「私の8月15日」14・17
あの日の夏
今井久夫／小島章伸／志甫博／堂
本暁子／原孝文／藤原作弥／堀越
作治／牧内節男／松尾文夫
記者たちの夏
高橋利行／星浩／安達直正／平井
治

ワーキングブレス 18・19
ギリシャ債務危機
朝日新聞社 梅原季哉
新幹線焼身自殺・火災事件
毎日放送 津村健夫

被災地通信 福島県楢葉町 20
福島民報社 円谷真路

リレーエッセー 21
「曲がったことが大嫌い」を地で生
きた米原万里さん
TBSテレビ 金平茂紀

記者ゼミ 次世代ジャーナリズム
の現場編 22・23
福原伸治・フジテレビ／小林恭子・在英
ジャーナリスト／平和博・朝日新聞

試写会 日本のいちばん長い日 24
宇治敏彦

マイBOOKマイPR 25

ドイツ・イスラエルの和解はなぜ可能か 海外取材団12人

国家の実利と個人の内面の間で

日本記者クラブは6月30日から7月9日まで、8泊10日の日程でドイツとイスラエルに第13回海外取材団を派遣した。ナチによる600万人のユダヤ人虐殺の後、ドイツとイスラエルがどのように和解し、現在の関係はどう進んでいるか。戦後70年に際し、2つの国を歩き、聞き、考える旅となった。政治家、学者、記念館、市民団体から高校生まで取材した人は20人を超える。

企画には在日ドイツ、イスラエル大使館の協力を得た。研究会「ドイツの戦後和解」の講師、武井彩佳・学習院女子大学准教授も加わり、解説や通訳をお願いした。事務局も含め9社12人が参加した。参加した記者たちの声を今月号で特集した(10・13頁)。

参加した一人として、国家の「実利」と個人の内面の意識について手短かに触れておきたい。

なぜ和解が可能だったのか。ドイツのシンクタンク研究員、ムリエル・アッセルブルクさんは「両国の利害が一致したから」と説明した。ドイツは占領を脱して国際社会に復帰するため、ユダヤ人との握手が必要だった。建国直後のイスラエルも支援を求めた。双方の国益につながるから和解に達した、と言う。同じ解説はイスラエルでも聞いた。

身もふたもない話だが、外国人は「なるほど」と納得してしまう。実利なき外交はありえない、と思いついてるからだろう。奇跡に思える

和解でも、裏にはやはり計算があったと理解するわけだ。

だが、それは半面でしかないだろう。取材したどのドイツ人もユダヤ人虐殺を「犯罪」と語り、歴史の責任を今も引き受けると話した。「二度と同じことを起こさない責任が僕たちにはある」と17歳の高校生マルテ君は言う。ナチ時代とはまったく別物に変わった、と世界に認めてもらわないと、生きていけない。そういう感覚が個人の内面にある。

家族を殺したドイツ人の謝罪をユダヤ人は受け入れた。憎しみを越えて歩み出すため、個人の内心を整理する上で、それは欠かせなかったのではないか。

国家や指導者の判断だけではなく、一人ひとりの心の動きが歴史を作る。戦後70年の夏に考え込んだ。

(専務理事 中井良則)

シリーズ企画「戦後70年 語る・問う」ゲストとキーワード(敬称略)

- 2014年
- ①赤坂真理、原武史(9・11)・・・戦後史
- ②保阪正康(10・7)・・・昭和天皇
- ③加藤典洋(11・7)・・・敗戦後論
- ④高木勇樹(11・13)・・・農政
- ⑤山田太一(11・14)・・・テレビ
- ⑥小峰隆夫(11・19)・・・経済
- ⑦志摩篤(12・3)・・・自衛隊
- ⑧張本勲(12・3)・・・プロ野球
- ⑨渡辺靖(12・12)・・・アメリカ
- 2015年
- ⑩見田宗介、大澤真幸(1・6)・・・日本社会
- ⑪明石康(2・3)・・・国際社会
- ⑫濱口桂一郎(2・16)・・・雇用
- ⑬宮本康昭(2・23)・・・司法
- ⑭竹内洋(3・5)・・・大衆社会
- ⑮川島真(4・24)・・・中国
- ⑯富田武(5・11)・・・シベリア抑留
- ⑰篠田正浩(6・1)・・・映画
- ⑱石原信雄(6・3)・・・官僚
- ⑲石田憲(6・4)・・・イタリヤ
- ⑳小長啓一(6・16)・・・田中角栄
- ㉑アンドルー・ゴードン(6・22)・・・社会変化
- ㉒白井聡(6・25)・・・永統敗戦論
- ㉓行天豊雄(7・1)・・・通貨
- ㉔ロジャー・パールバース(7・13)・・・物語
- ㉕今野勉(7・16)・・・テレビ
- ㉖藤原作弥(7・21)・・・満州
- ㉗樋口陽一(7・27)・・・憲法
- ㉘青木富貴子(7・30)・・・占領

戦後70年総理談話に 関する声明発表

学者の良心と責任とは何か
7・17(金)記者会見/司会：橋本五郎委
員/出席：118人/動画



左から波多野澄雄、毛里和子、三谷太郎、大沼保昭、小此木政夫、石田淳の各氏
「戦後70年総理談話について」と題した声明は、そのひとつの姿を示したと言っている。歴史的

事実に基づきながら、国際的な視野に立って過去の戦争と戦後日本の歩みを考え、未来につなげていく。それは憲法をどう解釈するかを第一義にする憲法学者などとは自ずと違ってくる。政治的信条や学問的立場の違いを超えてわれわれの最小限の意志を示そう。そういう熱意が伝わってくる記者会見だった。

代表は三谷太郎さんと大沼保昭さん。三谷さんのような文化勲章受章者が署名の先頭に立つのは珍しいことだろう。署名者はその道のエキスパートであり、2つの明確なメッセージを発している。

ひとつは日本が1931年から45年まで遂行した戦争は、国際法上違法な侵略戦争であったことは国際社会で確立した評価であること、もうひとつは「村山談話」や「小泉談話」を「全体として継承する」という安倍首相に対し、具体的な表現によって明らかにするよう求めていることである。

記者会見では、特定のイデオロギーや立場に基づく質問も予想されたが、大沼さんらの真摯な対応で落ち着いた会見になった。声明を読めばよくわかるが、ある特定の言葉を使うかどうかで総理の談話の良しあしを論ずることの是非や、後世の私たちが侵略かどうかを論断することへの逡巡にも言及している。異論にも配慮した苦心の文章であることを参加者も感じ取ったことだろう。全文を読むことをお勧めしたい。

企画委員 読売新聞特別編集委員 橋本 五郎
※声明文はクラブ・ウェブサイトで読めます。トップページ検索欄に「戦後70年談話声明」と入力してください。

森喜朗

東京オリンピック・パラリンピック組織委員長
7・22(水)記者会見/司会：島田敏男委員/出席：236人/動画



冒頭、事態の急転ぶりを話した。7月末に国際オリンピック委員会(IOC)

時の人の登場に、場内は立ち見もでた。会見5日前に安倍晋三首相が新国立競技場計画案を「白紙撤回」したばかりである。「会見申し込みのあった時は、こんなことになるとは夢にも考えていなかった」

責任は全体で負わなきゃならん

運営していく立場に過ぎない。しかし、一般の人々の思いは異なる。2020年大会開催に向けた新国立競技場建設に組織委員会が関与しないはずはない、当初予算の1300億円が2520億円にまで膨らんだ背景に何か動きがあったと考えたとしても不思議ではない。「オリンピックは大変なお金がかかる」で済ましていいものか。

19年開催のラグビーのワールドカップも問題を複雑化した。森会長は日本ラグビー協会前会長である。明確な説明もせずに主導した文部科学省、日本スポーツ振興センター(JSC)の責任は免れ得ない。森会長も「JSCや文部科学省が扱う素材ではなかった」と話す。責任を問う質問には、「どこに責任があるかを言うのは難しい。全体で負わなきゃならんことだと思ふ」。

一方で、ラグビーを引き合いにして「ワン・フォア・オール」「オール・フォア・ワン」と今後の在り方を説いた。大会開会まで5年を切り、残された時間は多くはない。「オールジャパン体制」で招致決定当時の高揚感を取り戻し、祝福される大会にしていく責務がある。要としての森会長の役割は大きい。

産経新聞特別記者 佐野 慎輔

戦後70年

行天 豊雄 国際通貨研究所理事長(元大蔵省財務官)

米ドル一極体制に挑戦する中国

7・1(水)シリーズ企画「戦後70年 語る・問う」②/司会：実哲也委員/出席：71人/動画



旧大蔵省で国際金融問題の最高責任者である財務官を務め、「国際通貨マフィア」の一員として知られる。第一線を退いた現在でも、メディアを通じた発言などで、影響力を保持する。

国際金融情勢を揺るがすギリシャ問題については、「ギリシヤは(ユーロ圏の)政策金利統一のおかげで、かなり低金利で資金調達でき、楽になったので、税でも社会保障でも甘くなった」と手厳しい。とはいえ、「ユーロ離脱のコストが高いことは、(ギリシヤも)分かっているはずなので……」と述べ、混乱回避への期待をにじませた。

世界第2の経済大国である中国については、「米ドル一極支配的な体制を、何とか変えたいという非常に強い意図を持っている」として、貿易取引の人民元化、元建て債発行など人民元の国際化、交換性付与、金利自由化などの例を挙げる。

中国が中心になってアジアインフラ投資銀行(AIIB)を設立したのは、「自分たちが新しい国際的指導者の1人であることを証明するためだ」と言う。「それに参加するのは、そういう中国の国際的ステータスを受け入れることだ」とも。筋道立った話しぶりは現役時代と変わらない。

東京新聞出身 川北 隆雄

ロジャー・バルバース 作家、演出家

広島・長崎を「物語」にしなかった戦後

7・13(月)同シリーズ企画④/司会：中井良則専務理事/出席：45人/動画



日本語を知らずに初めて東京に来たのは1967年。目黒駅近くでおでんの屋台に入った。「チクワ」が最初に覚えた日本語だった。それから約半世紀。ニューヨーク生まれのユダヤ人作家は日本に住みつき、宮沢賢治や井上ひさしを英訳し世界に紹介した。今年は戦争中の沖縄を舞台に風変わりな小説『星砂物語』を日本語で書いた。

越境者が見た戦後日本は、持つべきナラティブ(説話、物語)を失った姿らしい。「ユダヤ人はナチのホロコーストを民族の物語の中心にした。同じように、広島・長崎の原爆は戦後日本のナラティブになるべきだった。20世紀最大の災難なのに、日本人は原爆投下を異物として、マイナーなことしか語らない。残念です」

沖縄も3・11震災の東北も忘れられたようにみえる。「ナラティブにしていないし、メインテーマだ、と感じないのは間違いです。沖縄や岩手を抱きしめる。そうしないと、日本はこれからどうなるか不安だ」

記憶の枠組みを作れば、次世代に伝え、世界に発信できる。ナラティブという概念で、戦後の欠落をすくい上げる。そう受け止めた。

日本記者クラブ専務理事 中井 良則

今野 勉 テレビ演出家

今野勉さんへの手紙

7・16(木)同シリーズ企画⑤/司会：星浩委員/出席：43人/動画



「お前はただの現在に過ぎない」
私自身はテレビ朝日に入社した時から、そして、仙台のローカル局で働く今も、この言葉の意味を考え続けてきました。

今野さんは、「オリンピックと沖縄」についてから話を始められましたね。東京オリンピックの時にTBSで制作されたドラマ「土曜と月曜の間」、この日はこの作品の一部分しか拝見することができませんでした。その手法の斬新さと、28歳の若さで日曜21時放送の芸術祭参加作品を作るといって、その時代のテレビの若さが心に残りました。5年後に再び東京オリンピックを迎えるこの国の沖縄をめぐる有様は何も変わっていないようですね。

「テレビと大衆の向き合い方」のお話も印象的でした。私自身は今、テレビが地域の大衆とどう向き合っていくのか試行錯誤しています。今野さんは最後に「今、テレビはけっこう頑張っていると思う」と言われました。私には若いテレビ人への励ましのように聞こえました。

最後になりましたが益々のご活躍をお祈りいたします。

東日本放送常務取締役 芋原 一善 敬具

戦後70年

藤原 作弥 元日銀副総裁(元時事通信解説委員長)

真に豊かな「生活文化立国」を

7・21(火)同シリーズ企画②/司会：川戸恵子委員/出席：62人/動画



経済記者から日銀副総裁へと華麗なる転身を遂げた藤原作弥氏は、昭和史を検証するジャーナリストとして「歴史の語り部」の顔も持つ。

原点は70年前の満洲(現中国東北部)からの引き揚げ体験。終戦の前日、満洲北部の興安街(現ウランホト)で起きた「葛根廟事件」。女性や子どもたちがソ連戦車隊の銃撃で命を落としたこの惨劇を、かろうじて逃れたのが当時8歳半の藤原氏だった。

同氏が執筆した『李香蘭 私の半生』(1987年刊行)は大きな話題に。当時参院議員だった山口(大鷹)淑子さん(故人)の数奇な人生を、本人との共同執筆という形で世に出した。満洲(中華民国)育ちで中国姓を名乗る女優、歌手としてデビュー、戦後は日米で活躍した故山口さん。その生きざまを「昭和史の申し子」として約2年半かけて取材・執筆した。

78歳の今も昭和史発掘に取り組む老ジャーナリストは「日本は戦前は軍事特化、戦後はマネー特化」と分析。その上で、「今こそ教育、環境、文化、科学技術にジャパンパワーを傾注すべき」と新安保法制に突き進む安倍政権に疑問を投げかけ、真に豊かな「生活文化立国」を熱く訴えた。

時事通信出身 泉 宏

樋口 陽一 東京大学名誉教授

時代は碩学を遊ばせない

7・27(月)同シリーズ企画③/司会：倉重篤郎委員/出席：67人/動画



教壇で身についた習性か。背後のホワイトボードにまず、政治、憲法、学問を頂点とする三角形を描いた。さて、この3点が生む連関と緊張は？ 該博な知識を駆使する樋口ゼミの幕開けである。安保法制をめくり、戦後70年の夏があつい。そして憲法の、この大御所も。いつもの穏やかな口調ながら、安倍政権への批判は容赦がない。

立憲主義や「歴史と記憶」への無理解、蔑視。最高裁・砂川判決の独善的解釈。現政権は西欧流の価値観を捨て、アジア型独裁に歩を進めているという。

思考スタイルは外柔内剛といつてよい。東日本大震災の後、出身地・東北の復旧に汗した自衛隊員らには深い敬意を示す。だが、「隊の存在と憲法9条に整合性なし」。自説を曲げることはない。9条が隊の暴走を食い止めてきたのだから、と。

国会前のネット世代の集い。「この国の今と将来に自信を持った」。そう述べたという。憲法で最も重きを置く「個人の尊重」(13条)。その理念が醸成した若者たちの自立心に希望の光を見る。

鶴見俊輔、奥平康弘。少し前に、先達と仰ぐ加藤周一。リベラルなリーダーは次々先立った。書齋派を脱し、後を担う覚悟はできたようだ。

年齢80。時代は碩学を遊ばせはしない。(敬称略)

朝日新聞出身 田上 幹夫

青木 富貴子 ノンフィクション作家

日本は歴史の検証をしているのか

7・30(木)同シリーズ企画④/司会：杉田弘毅委員/出席：58人/動画



占領期に米兵と日本人女性の間生まれた混血児を救うために、エリザベス・サンダース・ホームを開いた沢田美喜。三菱の創始者・岩崎弥太郎の孫娘であり、夫は大戦中に外務次官だった。

昭和の光と陰が凝縮した本『GHQと戦った女 沢田美喜』は、「戦前には巨万の富を持った財閥の令嬢が、混血孤児の救済という戦争の後始末にたった一人でも果敢に立ち向かった」物語だ。占領期をテーマにした著者3冊目の本である。

占領軍は混血児を「米軍の恥」ととらえ、「恥の宣伝」であるホームの設立に強く反対したという。沢田は、だから「GHQと戦った女」なのだ。吉田茂、ウイロビー、キャノンら戦後を動かした人物が次々と出てくる。そして下山事件。戦後史の裏面に切り込み、興味深い。

日本は「歴史の検証をしっかりとやらなかった」と言う。米国在住が長いが、その米国は「どんどん悪化し寛大さを失った」。日本への要求も強まるだろう、と予測した。

会場で著者は沢田の1953年のインタビューを読み上げた。「再軍備、絶対反対。戦争の後始末を仕事としてやっている身ですもの、戦争はもうまっぴら」

企画委員 共同通信編集委員長 杉田 弘毅

ブラッド・アダムス
ヒューマン・ライツ・ウォッチ(HRW)アジア局長

「現地の声を軽視」とJICA批判

6・24(水)記者会見/司会:土生修一事務局長/通訳:西村好美/出席:42人/動画

人権向上をめざす国連NGOのHRWは、JICA(国際協力機構)の人権に関する取り組みを調査してきた。



アダムス氏は「日本の寛大な国際援助に敬意を表したい」としたうえで、「しかしダムや道路などの援助事業に伴い、現地住民の意思に反し強制移住が行われ、人権侵害が起きている例がある」と指摘する。

「一党独裁型の国家に援助する場合、政権だけでなく、対象地域の住民との意思疎通が重要。しかしJICA職員はリスク回避のためか、事務所にもりがちで現場に足を運ばない傾向があり、結果的に独裁政権を支援している」と批判する。

「援助大国」としての中国にも言及、「援助額で中国と対抗しても無理。民主主義国らしい人権に配慮した方法こそ日本がやるべき援助」と力説した。

同席した土井早苗・HRW日本代表は「人権問題は対象国の責任とJICAは主張するが、人権の優先性をもっと理解してほしい」と語った。JICAの反論を聞いてみたい。

日本記者クラブ事務局長 土生 修一

大西 隆 豊橋技術科学大学学長、日本学術会議会長

人口民間臨調
トータルな人口減対策を提言

7・2(木)記者会見/司会:川村晃司委員/出席:77人/動画

「このまま今の出生率が続けば、今世紀末に日本の人口は半減してしまう」。元朝日新聞主筆の船橋洋一氏が設立した日本再建イニシアティブはこんな危機感から人口問題民間臨調を立ち上げ、このほど報告書『人口蒸発』5000万人国家「日本の衝撃」をまとめた。

座長の大西隆・日本学術会議会長(都市工学)が会見し、提言を説明した。



出生率を人口置換水準に戻す努力を続けることはもちろんだが、戦前のように「産めよ、増やせよ」というわけにもいかない。結婚、出産の希望がかなう政策の実現に全力を挙げることに加え、大西座長は効率的に暮らせるコンパクトシティの形成など人口減への適応策、そして各地に付加価値の高い産業を興して人を集めるなどの緩和策が必要だ、と強調した。

人口問題は全ての分野が絡み、トータルな対策が必要とされる。そのため会場からは「超高齢化の乗り切り策も示さないと、理解を得られないのでは」「西欧は5千万の人口でうまくやっているのでは」など、さまざまな意見や質問が出された。

企画委員 朝日新聞出身 梶本 章

武富 和彦 沖縄タイムス編集局長

潮平 芳和 琉球新報編集局長

「共にあらがいたい」と呼びかけ

7・2(木)記者会見/司会:川上高志委員/出席:161人/動画



沖縄の地元2紙の編集局長が並んだ異例の記者会見は「腹の底からの怒り」を抑制した口調ながら、発せられる言葉は重いものばかりだった。

「普通に権力を監視するジャーナリズム活動をしているのに、記者会見をしなければならぬほど、この国の民主主義は劣化し、表現の自由、言論の自由は危うくなったのかと思う」

自民党若手議員による勉強会で相次いだ2紙や報道機関に対する威圧的な発言。両氏は、沖縄の米軍基地問題や2紙、そして県民に対する「甚だしい事実誤認」「誹謗中傷」を看過できないとして、具体的に反論し、撤回・訂正を求めた。

今回の発言は沖縄2紙だけの問題ではない「報道圧力」。両氏は「全メディア、言論の自由への挑戦と感じているので、共にあらがっていききたい」と会見場の記者らに呼びかけた。

さらに、中央(在京)と地方のメディアの意識差、中央による地方コントロールの危うさも強調した。この部分も心して聞いた。

企画委員 西日本新聞東京支社編集長 原田 正隆

維新の党 安保法案発表会見

本音と建前を使い分け？ 分裂の火種も

7・6(月)記者会見/司会：三反園訓委員/出席：81人/動画

維新の党が安全保障関連法案をまとめたのを受けて記者会見した。

与党側は維新が対案を提出したことを歓迎している。対案を提出した以上、採決を欠席しないだろう、野党のうち1党でも出席していれば強行採決にはならない、というわけだ。



長途幹事局長、事務局長、調査会長、安保調査会長、高橋雅人、山田太郎、丸山俊久、小野次郎、左小野次

柿沢未途幹事長は早急な採決には反対する姿勢を強調しながらも、欠席するかどうか明言を避けた。また、憲法学者が「違憲」としている集団的自衛権を認めるかどうかについても言明しなかった。

「与党側と国民の反発にも配慮する」。つまり、本音と建前を使い分けているなどの印象を持った。

また、橋下徹最高顧問(大阪市長)が関西での新党構想を打ち上げたことについて、柿沢幹事長は「はいそうですかと聞き流すわけにはいかない」、丸山穂高代議士も「いつまでも橋下氏に頼ってはいけません」と強調。

政権との連携も視野に入れている橋下氏ら「大阪組」と、民主党との連携をめざす勢力との路線対立の深刻さも浮き彫りに。この先、分裂も?

企画委員 テレビ朝日コメンテーター 三反園 訓

堺屋 太一 アジア刑政財団会長、作家

日本は安全だけどこか面白くない

7・14(火)記者会見/司会：山崎登委員/出席：53人/動画



官僚として大阪万博(1970年)を企画したり民間人として経済企画庁長官を歴任した経済通として知られるが、治安問題にも関心を寄せる。冒頭から

日本が世界でどれだけ安全な社会なのかを、殺人や交通事故の発生件数などの数字を列挙して説明してみせた。治安の良さをPRする手帳「データでみる安全な国 日本」を発行した「アジア刑政財団」会長としての会見だった。

安全・安心・正確・清潔。4つのキーワードを日本の美点として何度も挙げ、「全国民、全世界の人に知ってもらいたい」と述べた。

しかし、安全安心ばかりが重視される社会への不満の方が本音だったかもしれない。「安全・安心・正確・清潔になる一方、社会に面白みがなくなつた」「途方もない安全志向になったが、気をつけな」と、監獄国家になる非常に危険なところだと思ふ。次々と聴衆に警告を發した。

現在を、明治の強い日本、豊かな社会をめざした戦後日本に続く「3番目の日本」と位置づけ、「次は楽しい日本に」と呼びかけた。段階的に移民を受け入れた方が良くと述べるなどの発言からは規制嫌いの大阪人らしさもうかがえた。

毎日新聞社会部 長谷川 豊

小林 喜光

経済同友会代表幹事(三菱ケミカルホールディングス会長)

「先輩は戦犯」の思いで経営を

7・22(水)昼食会/司会：安井孝之委員/出席：82人/動画

経済同友会の代表幹事としては初めての会見。持続的な社会に向けて、「Japan2・0」を提案し、日本経済のバージョンアップをめざす思いを語った。理学博士でもある。(Z=a+bi)という数式を示し、「アトム(a、原子)とビット(b)、インターネット(i)のハイブリッドの時代」と定義した。リアルな世界のものづくりだけでなく、サイバー空間のデータもフル活用して経営戦略に知恵を絞るべし、という問題提起だ。



小林さんの言葉には独自性がある。常識や世間で喧伝されている理屈も「脳漿」を絞って考え抜き、本質を見いだす試行錯誤を続けている証左だと思ふ。

どこかで聞いたような話をとうとうと話す経済人が多い昨今では、ユニークな存在である。

東芝の不正会計問題については、ROEなど数値目標一辺倒の経営にくぎを刺し、「数値目標だけというの悲しい話です」。東芝では相談役や会長が影響力を持ち、経営に口を出していた弊害も指摘されるが、「2、3年前にとんでもない社長がいて、その尻ぬぐいで苦勞するというのが一般的。先輩は戦犯だと思ひながら経営すべき」と前任者との関係をクリアにする大切さを指摘した。

企画委員 朝日新聞編集委員 安井 孝之

レザ・ナザルアハリ 駐日イラン大使

日本企業はイラン参入で出遅れている

7・23(木)記者会見/司会：杉田弘毅委員/通訳：稲見蒼彦
/出席：51人/動画



絶好のタイミングだった。イランの核開発問題で、国連安全保障理事会常任理事国にドイツを加えた6カ国とイランが包括合意に達して9日後の会見だったためだ。

イランは今回の合意で、国際社会への本格復帰にめどが立ったと考えているのだろう。大使の表情は終始、穏やかで口調は滑らかだった。合意の背景について大使は、「米国がわれわれの立場を認め、歩み寄ってきた」と強調した。

対イラン経済制裁が年内にも解除されるとの見通しを示しながら大使は、「イラン市場への参入で日本企業は高い潜在能力を持っている」と述べ、理由について、日本とイランとの歴史的関係の深さや日本企業の持つ技術力の高さを挙げた。

一方で日本企業のイランへの出足が鈍いことについて立ちを覚えているようで、「欧州やトルコ、中国、韓国などの企業は2013年秋の暫定合意以降、相次いでイランを訪問し、制裁解除に備え商談を始めている。しかし、日本企業はイランへの参入で遅れている」と語った。

日本の安全保障関連法案や原発関連での両国の協力の可能性にも触れ、実り多い会見になった。

毎日新聞外信部長 小倉 孝保

遠藤 利明

東京オリンピック・パラリンピック担当相

新国立競技場「責任もってやる」

7・24(金)記者会見/司会：和田圭委員/出席：120人/動画



2020年東京五輪の開幕まで「あと5年」にあたる日の会見を、こう切り出した。「ちょうど5年後の7月24日、夜の8時くらいでしょうか、新しくできる国立競技場で開会式を迎えます。夜の開幕は、東京の夏の天候を考えると極めて妥当で、まだ調整が残るが、歓迎される方向性の示唆である。

と同時に、ここで述べた新しい国立競技場の建設が当面の最重要課題だ。巨額工費が批判を浴び、計画の白紙撤回が決まったばかり。5年後の五輪のメインスタジアム建設に、関係閣僚会議の議長になり陣頭指揮にあたる。「建設主体はJSC(日本スポーツ振興センター)ですが、閣僚会議と(その下の)推進室で指揮監督する。私の下で責任をもってやっていく」。担当大臣としての自負をにじませた。

山形での少年時代からスポーツに熱中した。議員になってからも思い入れは強い。大会の成功へ、条件を3つ挙げた。安全安心な開催、日本選手の活躍、障害者と健常者の共生など五輪のレガシー(遺産)づくりである。前回大会は戦後日本の復興を記した。今回は東日本大震災からの復興を世界に示す。「世界最大のお祭り」と五輪を位置付けつつ、被災3県の住民への視線も持つ。

共同通信編集委員 小沢 剛

森 伸生

拓殖大学イスラーム研究所長

「イスラムは楽な宗教」

7・29(水)研究会「イスラムの視点」②/司会：脇祐三委員/出席：48人



「すべては神の意志の中にある(と考える)。イスラームは楽な宗教だと思っています」
サウジアラビアのメッカ大学で学んだイスラーム法学の深い学識とアラブ世界での豊かな生活経験に基づいて、森伸生所長は率直なイスラーム観を披露し、笑いをとった。

イスラーム世界をめぐる報道には、送り手の知識の不十分さから、正確さを欠いているものも少なくない。逆にイスラーム教徒から抗議を受けると、その内容や、他の宗教をめぐる報道とのバランスを深く検討せずに、報道機関としての主体性に疑問を招くような対応をとる事例も見受けられる。今回の会見と質疑応答は、報道に携わる者に有益な時間だったはずだ。ムスリムの日常でも、より宗教的な人と世俗的な人との両面を深く知りたいたいと言った私は、「欲張り」と一笑されたが：

過激派組織が同じイスラーム教徒を殺害するテロが相次ぐ中で、森さんは、預言者ムハンマドの時代にも同様の事件があり、預言者が殺害者を厳しく問いただしたとされる伝承を紹介。「こうした教えが(イスラーム世界で)伝えられている事実をわれわれは忘れてはいけない」と結んだ。

東京新聞外報部 嶋田 昭浩

Chang Yongbin
程永華

駐日中国大使

7・23(木)昼食会／司会：伊藤芳明理事
長 島田敏男委員／出席：156人／動画

2010年4月の着任直後、13年4月の習近平体制発足直後に続く3度目の会見だった。戦後70年を意識しつつ、改善の軌道に進み始めた日中関係を何とか安定させたいという思いがにじんだ発言が目立った。



1つは「好むと好まざるとにかかわらず、隣国同士は引越してできない」という発言だ。地理的条件は変えられないのだから、けんかしてばかり

**「日本は仮想敵国ではない」
日中関係改善に腐心**

はいられないという基本認識だろう。中国からの訪日客が日本で買った商品に「メイド・イン・チャイナ」が多いという指摘もあった。ブランドは日本でも生産地は中国という場合が少なくないらしい。中国製品に日本製の部品が使われ、その逆もある。それだけ日中の経済関係が緊密化していると強調していた。

戦後70年の歴史認識問題では「侵

略戦争の責任を明確にし、誠意を持って反省するよう求めている」とくぎを刺す一方で、「戦後、平和国家としての歩みを堅持し、世界の平和と安定に貢献してきた」と日本の戦後の歩みを積極的に評価するバランス感覚を見せた。

「専守防衛政策が変わるのではないかとの疑念がある」と安保法制への懸念を率直に示しながらも、中国側には「日本を仮想敵国にしようという考えは毛頭ない」と明言した。

会見前日、東シナ海に中国が増設したガス田関連施設の写真が公表されたことで参加した記者の関心は、この問題に集まった。「日本から異を唱えられる余地はない」と正当性を訴えながらも「中国側は抑制した態度を取っている」と事態の拡大を望まない姿勢だった。

通算の日本勤務が20年という中国きつての日本通。これまで2回の会見と同様に通訳なしで全て日本語でやりとりをこなした。大使としての5年間を振り返って「七転び八起き」と表現しながら「結局は起きてくるのだから良いことですが」と笑いを取るあたりに日本語能力の高さや人柄がうかがえた。

企画委員 毎日新聞論説室専門編集委員

坂東 賢治

ドイツ・イスラエル取材団 語録

(10・13日に特集)

◆ドイツ

▽クラウディア・ロート連邦議会副議長

歴史を閉じるのではなく、最も暗い歴史と向き合うことはドイツ人とドイツを強くする。東西ドイツの再統一が可能だったのは、ナチとは違うドイツと世界に思われたからだ。歴史に対する責任感は今現在のドイツ人のコンセンサスになっている。ナチに迫害された生存者がいる限り、補償を続ける。同性愛者など(謝罪から)漏れている人がいれば、落とし穴はふさいでいく。

▽クリステイネ・クネル・ザガ
ーイさん(躓きの石を説明)

平らに埋め込んであるので物理的に躓くことはない。しかし、立ち止まり、腰を落とし、頭を下げて名前を読む。頭で躓いてほしい。

▽マルテ君(17歳、ギムナジウムでナチ被害者の個人史を研究)

僕たちに直接の責任はなくても、二度と同じことを起こさない責任がある。過去は変えられないが、過去とは違うドイツを世界に発信する。

▽ムリエル・アッセルブルク国際問題安全保障研究所首席研究員

大戦後、両国の利害が合致したか

ら密接な関係となった。建国直後のイスラエルは経済・軍事の支援を必要としていた。ドイツは(占領から)国際社会に復帰するため、米国のユダヤ人社会の理解が欠かせなかった。ユダヤ人の代表としてイスラエルを認識し、国家として支援した。

▽ウータ・ゲアラント「記憶・責任・未来」財団理事兼担当

冷戦後、ナチの強制労働被害者が米国で個人補償を求め、集団訴訟を始めた。ドイツの政治・経済界は企業ポイコットを終わらせ、米国のビジネスを続けるための行動が必要となった。米国の裁判が和解に向かう決定的なきっかけとなった。

◆イスラエル

▽イスラエル・ラウ師(テルアビブ教区主席ラビ、ホロコースト生存者)

ドイツは米国、ポーランドとともに最も親しい国のひとつだ。だが、個人の感情、記憶は違う。70年たっても私は忘れることはできない。

▽ヤエル・リクラーさん(ホロコースト記念館教育プログラム担当)

今、イスラエルからドイツに移る若い人が増えている。イスラエルより暮らしやすいから。ただ、私の夫(46)はいまだにドイツ製品を買おうとしない。たぶん、ドイツに悪感情を持つ最後の世代でしょう。

第13回海外取材団

ドイツ・イスラエルの戦後和解

(9ページ下に「取材団・語録」)

初日のドイツ連邦議会のクラウドイア・ロート副議長からは熱のこもった歓迎を受けた。緑の党の共同代表も務めた女史は、最近国交樹立50周年事業でイスラエルを訪問したことに触れ、両国がここまで来たことは奇跡にも思えるが、それには実に長い道のりと多くの努力があったと、いかにドイツの政治がこの問題に一步一步真剣に取り組んできたかを語り、その補償総額は720億ユーロ(約9兆7千億円)7月現在レート)になることを明らかにした。日本に対しては「歴史にふたをせず歴史と共に歩むべきだ」と述べ、独仏歴史教科書が参考になると助言、歴史に向き合うことがドイツの民主主義を強じんしてきたと強調した。

ドイツでは、10人以上の人々と話す機会があったが、多くの人が強調した論点は、ほぼ共通だったような気がする。つまり、ユダヤ社会との和解は、600万人の大虐殺という歴史からすればある意味、奇跡的なものだった。だが、ドイツは国民的努力を傾注し、それをやり遂げつつある。そのためには補償や謝罪やそ

れをめぐる論争など、莫大なコストを払ってきたが、そのことがドイツの民主主義を逆に強くした。のみならず、ドイツの国際社会における地位を強化してくれた。日本に対しては、状況が異なり偉そうなことは言えないが、70年談話はむしろ和解に向けての発信をするチャンスに使うべきだ、というものだ。

3月、メルケル首相が来日し安倍晋三首相と首脳会談することがあったが、ドイツ関係者の言いつぶりがあつらすると、多分その際にメルケルさんが安倍さんに同趣旨の助言をしたに違いない、と私は受け止めた。それに安倍さんはどう反応したのだろうか。内政干渉とばかりに反発したか、それとも安倍談話にサブライズを盛り込まんと耳を傾けたか。いずれにせよ、

ドイツ

反省、記憶、継承の姿に見た「強さ」

共同団長 倉重 篤郎 (毎日新聞論説室専門編集委員)



「テロのトポグラフィー」資料展示館。ナチの蛮行を「読ませ」「見させる」教育的施設。案内役のナフマ事務局長の背後の写真はヒムラー親衛隊全国指導者(73)

日本はドイツの体験を過小評価すべきではない。特に、加害者であった歴史を忘れないよう、街のあちこちに「躓きの石」やメモリアルを造り、学校では子どもたちに迫害の歴史を伝え、今に至るまでナチ残党を国内法で処罰し、そして、新しく出てきた補償問題に前向きに対応する。反省し、記憶し、継承するのがドイツの強さである。そのことがドイツに国際社会復帰、東西統一、EU内の存在感強化という大きな国益を生んだことは見逃すべきではない。そのしたたかさこそ学ぶべきではないか、と思う。

■日程(8泊10日)

6月30日(火)夜成田発

ドイツ

7月1日(水)早朝イスタンブール經由ベルリン着▼アヴィ・ニール駐独イスラエル大使館公使会見▼クラウディア・ロート独連邦議会副議長(緑の党元共同代表)会見

2日(木)「躓きの石」見学▼ハンナ・アーレント・ギムナジウム(中高一貫校)訪問▼ペーター・プリューゲル独外務省アジア太平洋地域部長会見▼アーヌルフ・スクリーバ国立歴史博物館コレクション部長会見

3日(金)テロのトポグラフィー(S S親衛隊、ゲシュタポ)秘密警察の本部跡に設置されたナチスの資料展示館)見学▼独国際問題安全保障研究所のムリエル・アッセルブルク主席研究員昼食会▼「記憶・責任・未来」財団のウータ・ゲアランド理事會担当会見

4日(土)アレイダ・アスマン・コンスタンツ大学名誉教授(記憶の文化研究者)会見▼(ベルリン南西)ヴァンゼー会議記念館見学▼(ベルリン市内)焚書記念碑、ノイエ・ヴァッヘ(国立中央追悼施設)、欧州ユダヤ人虐殺記念碑、シンティ・ロマ記念碑など見学

5日(日)(ベルリン北部)ザクセンハウゼン強制収容所見学▼ベルリンからイスタンブール經由テルアビブへ

ユダヤ教の白い帽子を頭に乘せ「嘆きの壁」を見上げると、歴史が覆いかぶさってくる感覚だ。ここにソロモン王が第1神殿を造ったのは3千年前。すぐ近くにあるイエスの「悲しみの道」をたどれば、磔の十字架ならぬリユックを背負っただけというのに汗だらけ。足元で起きた血塗られた数千年の歴史の出来事が次々頭に浮かび、血のめぐりも速くなる。

この濃密な過去と対面して暮らすイスラエルの人々は、百年程度の歴史克服に苦闘する日本の取材団をどう迎えたのだろうか。印象的な言葉がいくつもあった。

モシエ・ツイマーマン・ヘブライ大学教授はドイツ・イスラエルと東アジアの歴史和解の相違について、「精神と伝統が違う」と語った。「ユダヤ・キリスト教の伝統をわれわれは持つ」

「悔悟、謝罪、許し」の枠組みがユダヤ・キリスト教にあるが、アジアではないというところか。「アジアには橋をかける共通の言葉がない」とも教授は答えた。自分は宗教色が薄いと言う教授だが、和解に果たした宗教の役割を十分

イスラエル

歴史、宗教、そして和解

共同団長 杉田 弘毅 (共同通信編集委員室長)

意識していた。

思い出したのが、イスラエルとの和解に成功した西ドイツの初代首相コンラート・アデナウアーだ。第2次大戦直後にこんなことを言った。

「世界には2つの大きな陣営しか存在しない。キリスト教的

的、西洋的陣営とアジア陣営だ」。アデナウアーが言うアジア陣営とはソ連、無神論者、そして個人の自由を服従させる体制のことだ。

自由の観念も体制と個人の関係も西洋では宗教が意味を持ち、アジアとは異なる。それが歴史和解の行方も左右する。教授の話聞きながら、自らの想像力の欠如にうろたえた。

民族絶滅を目標にユダヤ人600万人が殺された。ホロコーストのすさまじさと東アジアの戦争を同列に語ることに



91歳のペレス前大統領(中央)を囲んで。ペレス氏は「過去」よりも「未来」について多く語った。この会見には、現地特派員も参加した(7.6)

を誰もが否定した。だが、ヒントは多い。強制収容所から生還したユダヤ教指導者イスラエル・ラウ師は「忘れも許しもしない。現実に対応したただけだ」。イスラエルの建国に必要だったから和解を受け入れた。ドイツとイスラエルには「過去の克服」という共通の利益があった。

教育者は「トラウマは克服できると教えるのが教育」と言った。ホロコーストは両民族のトラウマそのものだ。それを克服したことを学べば、子どもたちに訪れる個人的なトラウマを克服する力になるのだろう。

取材団は死海にも足を延ばした。塩が濃くよく浮かんだ。対岸に見えるヨルダンの山々から砲弾が飛んでくることも、もはやない。だが、ガザ地区との戦いの方は、ある外交官は「時間の問題」と言った。こちらの方の和解は見通せない。ここでは宗教は役割を果たせないのか。血で歴史がまた上書きされていくのか。

イスラエル

6日(月)〈テルアビブ市内〉ラビン元首相記念碑、独立記念館見学▼イスラエル・ラウ・テルアビブ教区主席ラビ会見▼エフド・ハラリ・ヘブライ大学名誉教授(元東大客員教授)夫妻昼食会▼シモン・ペレス前大統領会見▼(エルサレム市内)モシエ・ツイマーマン・ヘブライ大学教授(歴史学)会見▼ハイム・ホシエン・イスラエル外務省経済審議官(元駐日イスラエル大使館公使)懇談会
7日(火)ヤド・ヴァシエム(ホロコースト記念館)見学▼ナタン・シャランスキー・ユダヤ機関(移住者受け入れ機関)長官会見
8日(水)死海、(旧市街)嘆きの壁、ヴィア・ドロローサ(悲しみの道)、聖墳墓教会など見学▼モニカ・イワーセン駐イスラエル大使館臨時代理大使会見▼テルアビブ発イスタンブール着(帰国の途へ)
9日(木)イスタンブール発成田着解散

参加者 倉重篤郎(共同団長・毎日新聞社)／杉田弘毅(共同団長・共同通信社)／高野弦(朝日新聞社)／天日隆彦(読売新聞社)／押野真也(日本経済新聞社)／緒方優子(産経新聞社)／齋藤雄介(中日新聞社)／小市昭夫(信濃毎日新聞社)／前田克(熊本日日新聞社)／武井彩佳(学習院女子大学)／中井良則(日本記者クラブ専務理事)／石川洋(日本記者クラブ企画担当部長)

● 知りたかった「ドイツのなぜ」

朝日新聞国際報道部部長代理 高野 弦
なぜドイツは、かくも「過去の克服」が徹底しているのだろうか。その精神性はどこからくるのだろうか。一連の取材を通して知りたかったのは、そのことだった。外交的な戦略、「1968年世代」の活躍、そして今なお残るユダヤ社会への偏見。これらまで必ずしも朝日新聞が伝えてこなかった側面が見えてきた。



ザクセンハウゼン強制収容所。門扉に「働けば自由になる」と。この日は米国、英国の学生グループが見学していた(7.5)

「暗い過去に向き合うことは、ドイツを強くする」。何人もの方々から同じ言葉を聞いた。それは、民主主義を確かなものにするという意味でもあり、文字どおり、対外的に「強く」出るための条件として説明した方もいた。宿願の東西統一を成し遂げ、欧州の経済危機では、今や中核として振る舞うドイツ。近隣国からの信頼があつてこそ、成し得たことなのだろう。

日本とドイツには戦争中の行いに違いがある。でも、それを突き詰め

て日本の戦争を相対化したところで、何も益するものはない。そんな思いを強くした。

● 奇跡のベストフレンド
読売新聞論説委員 天日隆彦
強制収容所の生存者で、イスラエルの主席ラビを務めたラウ師が、テルアビブのオフィスで「誰が許せと言うのか」と、厳しい口調で語ったのが印象に残っている。今もドイツでの宿泊は拒み続けているという。ただし、個人の感情と国家間関係は別の問題で、ドイツはベストフレンドだとも述べた。

● 奇跡のベストフレンド
読売新聞論説委員 天日隆彦
強制収容所の生存者で、イスラエルの主席ラビを務めたラウ師が、テルアビブのオフィスで「誰が許せと言うのか」と、厳しい口調で語ったのが印象に残っている。今もドイツでの宿泊は拒み続けているという。ただし、個人の感情と国家間関係は別の問題で、ドイツはベストフレンドだとも述べた。



ハンナ・アーレント・ギムナジウム高校1年の現代史授業。ホロコースト犠牲者の家系図を作成中(7.2)

産経新聞社会部 緒方優子
今回の最大の成果は、ドイツ・イスラエル両国で立場や階層の異なるさまざまな人物から、濃密な議論を通じて率直な意見を聞くことができたということだ。ドイツでは政治家だけでなく、研究者や教育者、子どもたちにも直接話を聞いた。また、イスラエルではホロコースト生存者と膝を突き合わせ、戦後70年を経て受け取った。こうした取材を通じ、両国の戦後和解が表面的な謝罪や金銭的な補償だけでなく、政治、経済、

● 奇跡のベストフレンド
読売新聞論説委員 天日隆彦
強制収容所の生存者で、イスラエルの主席ラビを務めたラウ師が、テルアビブのオフィスで「誰が許せと言うのか」と、厳しい口調で語ったのが印象に残っている。今もドイツでの宿泊は拒み続けているという。ただし、個人の感情と国家間関係は別の問題で、ドイツはベストフレンドだとも述べた。

● バランス感覚忘れまい
日本経済新聞カイロ支局長 押野真也
今回、イスラエルの取材のみ同行させた。イスラエルは日常業務のカバー範囲だが、ホロコーストに特化して教育分野まで踏み込んだ取材は初めて新鮮だ

取り組みが重要だったと強調した。米国の国際政治学者、ジョセフ・ナイは、「信頼性が主要なパワーの源泉になるにつれて、ソフトパワーが以前より重要になりつつある」と述べている。特殊なナチ犯罪への深い反省を示すベルリン市内の数々の施設を訪ね、そのことをあらためて考えさせられた。



副議長への安倍談話、「過去」と「未来」を学ぶこと(7.1)



「蹟きの石」は10cm四方の大きさに真ちゆう製。これはユダヤ人母子のもので、リガ(現ラトビア)連行3日後に殺害されたことある(7.2)

● 濃密な議論、重層的な理解
産経新聞社会部 緒方優子
今回の最大の成果は、ドイツ・イスラエル両国で立場や階層の異なるさまざまな人物から、濃密な議論を通じて率直な意見を聞くことができたということだ。ドイツでは政治家だけでなく、研究者や教育者、子どもたちにも直接話を聞いた。また、イスラエルではホロコースト生存者と膝を突き合わせ、戦後70年を経て受け取った。こうした取材を通じ、両国の戦後和解が表面的な謝罪や金銭的な補償だけでなく、政治、経済、

つた。ホロコーストは歴史的にみても衝撃的だが、パレスチナ自治区ガザの現状を見るたび、複雑な心境に陥る。中東情勢を報道する上で、「バランス感覚」が最も重要であることを思い起こさせる取材だった。



ホロコースト記念館「名前の殿堂」— 600人の写真から600万人の犠牲者に思いを寄せて」と日本語ガイドのヴァンさん (7.7)

時間的なプロセスの中で生み出されたということが重層的に理解できたことは貴重だった。

●「謎」が深まる

中日新聞社会部 齋藤雄介

知れば知るほど謎が深まる。9日間のドイツ・イスラエル取材は、そんな不思議な旅だった。

ベルリン郊外の湖畔に建つヴァンゼー会議記念館。ナチスの親衛隊幹部は、ここで欧州に住むユダヤ人1100万人を絶滅させる手順を決めた。たった1時間45分で、淡々とイエス・キリストの磔刑までさかのぼる、根深い差別の歴史が根底にあったと聞いても「なぜ」が消えない。

大量虐殺を経験した両国の和解はドイツ側の猛省と、首脳らが冷戦下の現実を直視してきた積み重ね。だが、パレスチナ難民という別の現実も。消化に時間がかかっている。

●「收容所跡の静寂



シャランスキー・ユダヤ機関長官会見 (左から武井さん、長官、杉田さん) 後ろに飾られている写真はシオニズム運動提唱者・ヘルツェル (7.7)

信濃毎日新聞報道部長 小市昭夫

ドイツは暑かった。特にあの日はベルリン北部のザクセンハウゼン強制收容所を訪ねた。門扉の飾り文字「ARBEIT MACHT FREI (働けば自由になる)」、その向こうに東京ドーム82個分の敷地が広がる。監視塔から見やすいように建物に放射線状に並んでいたという敷地を歩く。真真中に絞首台、奥の方にガス室や遺体焼却場、銃殺場……。20万人が收容されていたことを想像するのが難

しい静けさに圧倒される。

案内役のドイツ人女性が敷地外の林の中でこうべを垂れていた。收容所で何があったかを伝える音声がかに響く。帰りの車中で女性は言った。「つらいです」。歴史に向き合い続ける姿勢が垣間見えた。

●「記憶の文化」に学ぶ

熊本日日新聞論説委員

前田 克

国内では間接的にしか知り得なかった「ホロコースト」を直に学べたのが意義深かった。強制收容所やホロコースト記念館など展示施設への訪問、生存者の宗教指導者との面会など、多角的に取材することができた。600万という気が遠くなるほどの数の人間が殺されたという事実を直視し、「人はこんなにも残酷になるのか」と重い気持ちになったが、この国家的犯罪行為を胸に刻み込もうとする試みが今もドイツ国内で活発なことに少し救われる思いがした。被害者には一人一人に名前があり、生活があった。「躓きの石」は一方的にこの世から消し去られた被害者の存在証明と言えよう。かの地の「記憶の文化」から学ぶべきこと多かった。



ラビ・ラウ 1945年4月、独ブーヘンヴァルト強制收容所で解放された。ホロコーストはスピリチュアル・マッドネスという (7.6)

●研究と報道の連携

学習院女子大学准教授 武井彩佳

一般に、研究者と報道機関の情報交換が双方向であることは少ない。研究者は後者を表面的にすぎると感じ、逆に報道は前者を専門性に拘泥してスピードを欠くと考えている。今回、記者クラブの訪問団に参加させていただき(こうした取材に大学の人間が同行したのは初めてだったと聞いた)、先の

ような考えは百害あって一利なしと結論した。研究と報道の連携を強化することで、互いの仕事の質を上げることが出来る。普段は紙に書かれたものを分析する自分としても、人が繰り返す言葉の力をあらためて認識した、非常に実りの多い9日間であった。

【事前勉強会】6月26日(金)

川喜田敦子・中央大学教授(独の歴史教育)、武井彩佳・学習院女子大学准教授(在独ユダヤ社会)、石田勇治・東京大学大学院教授(独の過去の克服)、映画「夜と霧」鑑賞



短刀を砥いだ夜

堀越 作治 (朝日新聞出身 85歳)

米爆撃機B29から爆弾が降ってくるのを見て震えた5日後、中学3年の私は1年の弟とラジオを担いで30分先の駅まで運んだ。東京・板橋区の東上線東武練馬駅。駅長をしていた父の命令だ。母と幼い弟妹は田舎へ疎開している。

“玉音放送”が始まる。雑音でよく聞き取れない。終わると大人たちの意見は割れたが、熱烈な軍国少年だった私は「本土決戦」に賭けた。ところが、夜のラジオは「降伏」だと言う。突然、目の前が真っ暗になって奈落の底に引き込まれそうに感じた。「国辱だ、生きる意味がない」。物置にあった短刀をつかみだし、井戸端で砥いでいるうちに弟に見つかってしまった。「あんちゃん、死んじゃいやだー」。見つからなかったら？ わからない。



頭をよぎった集団自決

松尾 文夫 (共同通信出身 81歳)

7月19日夜、福井市でB29百二十七機による絨毯爆撃を生き延び、一家で岐阜県境に近い曹洞宗第二の名利、宝慶寺に着の身着のまま落ち延びてから1カ月ちょっと。それにもめげず、陸軍幼年学校をめざすためにはとの母親の方針で、歩けば3時間もかかる大野市内の国民学校に通うため、下宿していた尼寺で敗戦を聞かされた。

即座に頭をよぎったのは、まだ12歳ながら母親以下合計12人の弟や妹、叔母やいとこたちの集団自決の指揮を最年長の男子としてどのようにとるのか、との思いだった。この気持ちも高知防衛の部隊にいた父親からの「大御心に副うように」との手紙で、あっという間に消えた。9月に再開した学校の教室では、教室正面の日の丸がマリア像に替わっていた。



40年後に知った葛根廟の惨劇

藤原 作弥 (時事通信出身 78歳)

玉音放送を聴いたのは朝鮮との国境の町、南満州の安東(現・丹東)で、8月15日正午、西本願寺の本堂大広間。敗戦と知った時、満8歳の軍国少年は「ウソ！」と叫んだが、やがて大人たちの嗚咽に加わった。勝利を祝うチャルメラやドラの音が響き、朝鮮族の「マンセイ(萬歳)！」という叫び声が聞こえてきた。

ソ連国境、満蒙の僻地・興安街に住んでいた私たち一家はソ連戦車軍団の侵攻を受け8月10日、同地を最後の貨物列車で脱出、同13日、安東に着いたのだった。それから約1年半、苦難の難民生活を余儀なくされたが、1946年秋、一家無事で日本に引き揚げることができた。

40年後、満蒙の興安街にいたクラスメイトを含む1千名以上の同胞が、^{かっこんびょう}ラマ寺院、葛根廟近くの草原でソ連戦車軍団に大量殺りくされた事実を初めて知った時、48歳の私は、地に伏して慟哭した。

武士の魂を樹海に落とした男の告白

牧内 節男 (毎日新聞出身 89歳)



その日、西富士野営演習場に居た。陸軍士官学校59期・歩兵科の士官候補生たちは演習本部前に集合した。時に正午。ラジオの玉音放送は聞き取れない。敗戦の詔勅であるのは理解できた。嗚咽・慟哭。不謹慎にも私はほっとした。

実は2日前に富士の樹海での“挺身斬り込み”の夜間演習で指揮刀をなくした。低い松の木の下に身をかがめ木の根や岩につまづき敵陣に近づき斬り込む訓練。鞘だけが残り刀身がないのだ。翌日、同期生と樹海を探したが見つからなかった。武士の魂をなくせば「重営倉」と覚悟した。その日も朝から探しに行くことになっていた。詔勅を聞いて重営倉をまぬがれたと思った。途端、涙があふれ出た。生き恥をさらし奮闘した戦後であった。

8月15日、私は長野県杓掛(現在の中軽井沢)の別荘に母と2人でいた。父は、太平洋戦争が始まる直前に仕事で渡米したので、デンバー・コロラドの強制収容所に収監されていた。

小学校6年生で集団疎開した先が立川の陸軍飛行場に近い拝島村(現在の昭和市)。連日、空襲が続き、多摩川べりで米軍機の機銃掃射を受け、危機一髪で助かるなどしたので、母が私を連れて再疎開したのが杓掛である。

玉音放送を聴いた記憶はない。母から敗戦と聞き、すぐ好きだったお茶の先生の家に走った。「戦争が終わりました」と伝えると「そうですか、ありがとうございます」と静かに言われた。その先生の顔を見て心なごみ、父のことを思った。戦争は終わったが、父に再会することはなかった。



渡米した父と再会かなわず

堂本 暁子 (TBS出身 83歳)

「戦後70年」企画 私の8月15日

会報の戦後70年企画として2つの「8月15日」特集をお届けします。

1つは「1945年8月15日」。OB会員9人に、それぞれが胸臆にとどめる“特別な日”の思いを寄せていただきました。

もう1つは、首相の靖国参拝や談話発表などがあった1975、85、95、2006各年の「8月15日」。日本政治が大きく揺れた終戦の日をカバーした政治記者4人に、当時の現場をふりかえっていただきました。

玉音放送と汁粉



今井 久夫 (産経新聞出身、94歳)

1945年8月15日はまだ慶応大学理工学部応用化学科の3年生だった。終戦の日は死ぬ覚悟だった。ただし痛くない死に方をしたい。それがせめてもの願いだった。

さてその日が来た。いつものように何もないままに過ぎていった。何だか申し訳ないような、きまりが悪いような気がしてならなかった。ひとりりで照れていた。

願いといえばもうひとつ、汁粉がハラいっぱい食べたい。しかし叶わぬユメと諦めていた。天皇玉音を聴いていて、目の前に汁粉の山が現れたような気がした。放送の中身はとにかく、頭の中で汁粉がぐるぐる回っていた。それで終わりだ。人間とは他愛のないものだ。その時つくづく思った。しかし、顔はニコニコしていたに違いない。

学童疎開先での絶叫

志甫 溥 (TBS出身 79歳)



ドシンともガチャンとも聞こえた。長野の集団疎開先の広い部屋に置かれたラジオ(最後まで内容は不明)を正座してみつめていた僕ら疎开学童がふりかえって見た時、ベテランの先生が、後方の柱に激突してメガネを飛ばし、「くやしい！」と叫んでくずれ折れていた。僕らの間に少しずつ「戦争に負けた」という感覚がしみわたり、異様な空気がただよった。

突然、絶叫が広間を突き刺した。1年生のA子ちゃんが、お姉さんたちがなだめても泣き叫び続けていた。そして、涙もなく穏やかな顔つきをくずさなかった先生が一人おられた。ずっと後になって「ああよかった、と思っていた」と言われたことが心に残る。公民館の庭に乱れ咲くコスモスの色とともに。

耳に残る大西中将の訓示

小島 章伸 (日本経済新聞出身 87歳)



広島原爆のキノコ雲を望見した衝撃から旬日を経ずして迎えた敗戦。そのとき私は、海軍兵学校生徒(第76期、二号生徒)として江田島本校在学中だった。正午、天皇陛下の玉音放送。次いで1300(ヒトサンマルマル=午後1時)、75~77期の生徒総員が校庭に集合し、大西新蔵海軍中将(副校長兼本校監事長)の訓示を聴く。

ドイツの哲学者フィヒテの有名な敗戦演説「ドイツ国民に告ぐ」を紹介しつつ、「日本は無条件降伏することとなった。残念、無念だが、いたずらにめそめそ泣いている時ではない。日本という大文化国家は絶対に亡びない。諸子は日本の復興を双肩に担うべき人たちである。学に進め！」と嗚咽する生徒を鼓舞された。凜としたその声は、今なお強く耳に残る。挫折からのスタート。私の戦後人生の原点である。

よく晴れた暑い夏の盛りだった。私が16歳で終戦の日を迎えたのは、福岡県浮羽郡(現うきは市)吉井町の戦災疎開先であった。

正午からのラジオの「玉音放送」は雑音まじりでよく聴き取れなかった。本土決戦が叫ばれていた時代。国民に一層の艱難辛苦を求めると呼び掛けにも聞こえた。

3月10日の東京大空襲で焼け出され、一家6人、父の親戚の離れに寄寓していた。

開戦の年、東京府立七中に入学したが、戦時特例で終戦の年3月に4年で繰り上げ卒業。しかし軍関係へ進んだ者を除き、校長通達で学徒勤労動員が継続となり、疎開先から横浜・瀬谷の兵器工場へ呼び戻された。

昼夜二交代制の缶詰め動員が待っていた。九州から心配した父が迎えに来て、疎開先に戻ったのは終戦ひと月前だった。



解放感が全身を包んだ日

原 孝文 (読売新聞出身 86歳)

「戦後70年」企画

私の8月15日

1975年

三木首相 靖国「私人参拝」

ぎりぎりの決断

高橋 利行

(元読売新聞新聞監査委員長)

その日、東京・九段の靖国神社には真夏の太陽が照り付けていた。気象庁のデータファイルによると午後3時現在32・4度を記録している。私は広い境内でうろろろしていた。なにしろ3か月前に警視庁詰め的事件記者から政治部に配置換えになったばかりだった。総理番としては右も左も分からなかったし、夜の闇に身を潜めるようにしながら刑事の動きを追う事件記者と、大つぴらに名乗りを上げて取材する政治記者の違いにも戸惑っていた。

戦後、吉田茂や岸信介、池田勇人、佐藤栄作、田中角栄といった歴代首相は靖国神社を当たり前のように参拝していた。まだA級戦犯は合祀されていなかった。三木武夫が参拝する前年、自民党は靖国国家護持法案を初めて提出している。だが、成立させることはできなかった。だから現職首相の「公

式参拝」を強く求めていたのである。

椎名裁定で首相になった自民党内左派の三木が、こういう空気の中で「終戦記念日」に参拝するか、参拝するにしても、どういう資格で参拝するかが関心と呼んだのである。

私は結婚する直前、靖国神社にお参りし「英霊の尊い犠牲のおかげで結婚します。幸せになります」と誓っている。なぜ、これほど大騒ぎするのかと思っていた。

党内に脆弱な基盤しか持たない三木は違った。下手をすれば足をすくわれる。国鉄の分割民営化、ロッキード事件をきっかけに燃え上がる「三木降ろし」の走りだったのだろう。そういう党内情勢を睨んで、ぎりぎりの決断が「私人」としての参拝だったのだろう。

三木が日本武道館の全国戦没者慰霊式を終えて靖国神社に向かったという情報が入った。携帯電話がなかったから警察官の無線を聞いて総理の動きを掴んでいた。待ち受けていると黒塗りの車が入ってきた。黒塗りの車ではあるがナンバーが違う。総理大臣の専用車じゃない。見過ごしかねないところだった。だが、降りてきたのは紛れもなく三木であった。

口をへの字に結んでいた。後で聞くと武道館で自民党総裁車に乗り換えたという。SPはついていて、2カ月前の佐藤元首相の国民葬で暴漢に殴打さ

れた後だけに三木は二重に緊張したろうし、警護も気を使ったのだろう。玉串料も「ポケットマネー」で支払っている。記帳も、一切の肩書を記さず「三木武夫」とだけしたためている。役所の秘書官を乗せず、読売新聞政治部の先輩である秘書・中村慶一郎を乗せていた。(文中敬称略)

1985年

中曽根首相 靖国「公式参拝」

周到な準備で念願かなえる

星 浩

(朝日新聞特別編集委員)

暑い夏だった。30年前の1985年8月。12日には日航ジャンボジェット機が御巣鷹山で墜落。多くの死傷者が出た。日本中が騒然としていた中で、15日には中曽根康弘首相が靖国神社への公式参拝に踏み切るようになった。朝日新聞政治部で首相番記者になったばかりの私は、早朝から靖国神社の境内で首相の到着を待った。一般の参拝客、報道陣、警備の警察官……。境内はごった返していた。熱が地面から足に伝わって汗が止まらなかった記憶がある。

暑さがピークを迎えた午後1時44分、中曽根首相が訪れた。参拝を済ませた後、首相はテレビカメラの前に立

って「いわゆる公式参拝だ。憲法には違反していない」と明言。ようやく念願をかなえたという思いが、首相の表情から見て取れた。この日は、海外出張中の2閣僚を除く全ての閣僚も、首相に従って「公式参拝」をした。

中曽根氏は周到だった。「政教分離原則」を定めた憲法との兼ね合いについて、官房長官の下に有識者の懇談会を設置。論議を進めて、参拝の仕方によつては憲法に抵触しないという報告書を受け取った。中曽根氏は神道の参拝形式を薄めたやり方で、歴代首相が見合せてきた公式参拝を実現したのだった。

だが「逆風」は海外から吹いてきた。中国で靖国参拝を公然と批判するデモが起きたのだ。当時、中曽根首相が個人的な信頼関係を築いていた胡耀邦・共産党総書記も中国国内で批判にさらされる。思わぬ展開に、中曽根氏は翌86年8月の参拝は見送ることになる。

その後、首相による靖国参拝は、小泉純一郎、安倍晋三氏らが行ってきたが、「私的」か「公式」か、などは問われないままだ。中曽根氏が周到に進めた公式参拝は一度だけで終わった。憲法上のハードルをクリアしたかと思えた中曽根氏だったが、隣国からの視線は厳しかった。戦後日本が抱える「歴史」の重さを物語る公式参拝劇であった。

1995年

村山談話発表

陰の立役者2人の存在

安達 宜正

(NHK解説委員)

戦後50年の内閣総理大臣談話・村山談話が出された1995年の暑い夏。駆け出し、政治部3年目の記者だった私は、いわゆる官房長官番だった。「植民地支配と侵略に対する、痛切な反省と心からのお詫び」というキーワード。閣議決定を行って、政府の公式見解に格上げした政治的なメッセージ。これには村山富市総理大臣の思いとともに、2人の官房長官の存在があったからこそだと思っている。

1人は五十嵐広三さん。37歳で北海道旭川市長に当選。若い時からサハリの在留韓国人問題に取り組み、日本の負の遺産の解決をライフワークとしていた政治家だった。自民党などとの調整で「戦後50年の国会決議」が面白い形形で決着したときの五十嵐さんの言葉が忘れられない。「国会がダメなら、内閣でより踏み込む」。駆け出しの記者にも、その強い決意が伝わってきた。政府部内にもあった慎重意見を抑え、談話の原案にキーワードを盛り込むように指示したのは、五十嵐さんだった。

もう1人は五十嵐さんを引き継いだ野坂浩賢さん。批判を受けながらも、自民党の連立政権を主導した野坂さん。後世に村山内閣、社会党首班内閣が残せるものは何かをいつも考えていたように思う。村山改造内閣には自民党でも保守派に属する閣僚も多く、異論が出る可能性も取り沙汰されていた。野坂さんは閣議決定にこだわった。「大丈夫ですか」という私の問いに、野坂さんは「反対なら、辞めてもらいます」。それから数日、野坂さんは私たちをけむに巻きながら、自民党幹部や閣僚をまわり、根回しを続けた。

村山談話は「植民地支配と侵略、反省とお詫び」という文言を盛り込み、そして、閣議決定・政府の公式見解という形で決着した。それが20年たった今でも、議論の焦点となっている。

政策論議を展開し、ワインを好んだ五十嵐さん。政局を読み、次の手を常に考えながらも、笑いで記者を翻弄した野坂さん。今は亡き、味のある2人の政治家が村山談話の陰の立役者だった。



終戦記念日に参拝する小泉首相の背中をたくさんのカメラが追った(写真提供・東京新聞)

2006年

小泉首相 8・15靖国参拜

長期政権最後の『劇場』

平井 治

(共同通信福島支局長)

小泉純一郎首相は、東京・九段北の靖国神社に黒塗りの公用車で乗り付けると、モーニング姿で小さく一礼し、本殿の階段を上った。報道陣のフラッシュを浴び、口を真一文字に結んで板張りの廊下を進んでいった。境内に詰め掛けた200人以上の参拝者がどよめいた。

2006年8月15日の朝、現職首相としては21年ぶりとなる終戦記念日の参拝だった。首相は01年の自民党総裁選で掲げた公約の1つをようやく果たした。長期政権下で最後の「小泉劇場」でもあった。

この年は夏が迫るとともに、与党内を臆測が飛び交った。9月の退陣を前に8・15参拜で有終の美を飾るとの見方がある一方、中国、韓国との関係がこれ以上悪化しないよう配慮するべきだとの声も上がった。

8月に入ると、首相自らがあおるかのように発言をエスカレートさせた。「いつ参拝してもいいが、適切に判断する」「公約は生きている」「いつ行っても批判される。いつ行っても同じだ」

そして首相は参拝後、テレビカメラの前で約15分間、とうとうと語った。「参拝しなければ首脳会談をすというのはよろしくない」「思想、良心の自由だ」「いつでもこだわるのはマスコミなどと述べた。

私は首相官邸記者クラブでテレビ中継に見入りながらあせんとした。劇場の終幕がこれなのか。中韓両国を突き放し、憲法問題にまともに答えず、報道機関へ責任を転嫁している。

賛否はともかく、首相は郵政民営化、道路公団改革、北朝鮮訪問、衆院選で与党300議席超えなど数々の業績を残した。冷徹な政治家、希代の仕事師だったはずだ。

テレビ画面に映る首相の頭髪は随分白くなっていた。ライオンは老いたのだ。激しい権力闘争を勝ち抜く中でうみ疲れ、慢心が忍び寄っていたのかもしれない。

自民党の政権転落はそれから3年後のことだった。

ギリシャ債務危機

梅原 季哉(朝日新聞社)

1カ月以上アテネにくぎ付け
予測不能の展開と格闘

今年6月から7月にかけて最高潮に達したギリシャの債務危機は、まさに劇的な展開の連続だった。

最終期限が近づき緊迫する中で6月27日、欧州連合(EU)による改革案の受け入れ是非を問う国民投票をチラス首相が設定し、「ノー」を選ぶよう提唱した。これに対し、EU側が金融支援打ち切りを決定。ギリシャ政府は銀行破綻を避けるため、6月29日から窓口を休業させ、ATMからの預金引き出しも制限するという異常事態となった。

7月5日の国民投票では、予想を上回る投票者の6割以上が「ノー」を選択し、ギリシャが共通通貨ユーロから離脱するシナリオがいよいよ現実味を帯び始めた。だが、最後にはチラス首相が大幅に譲歩する改革案を提出。ユーロ圏首脳会議とギリシャ国会でこの改革案が支持され、危機はやっと遠のいた。私たちの取材陣はこの間、混乱する事態に振り回され続けた。

経済報道として、ポイントを押さ

えた分析が当然求められる。だが、ギリシャ流の物事の流れは、全てが整然と進むとは限らない。状況をどうわかりやすく伝えるか、背景にある社会構造や歴史の経緯にも目配りしながらの報道を心がけた。

もしもデフォルト(債務不履行)からユーロ離脱となれば、紆余曲折はありつつも前に進んできた欧州統合の系譜の中で、最大の後退局面となる。南欧を中心に、他の諸国にも飛び火しかねない。ギリシャ一国にとどまらない重みを持つと判断し、現場に手厚い態勢で臨んだ。

万が一に備え
多額のユーロ現金を持参

ギリシャ担当のローマ特派員は、6月初めから7月下旬まで通算で1カ月半以上、連続でも1カ月を超えてアテネにくぎ付け状態になった。ロンドンやパリ、東京からも現地入りし、最大時でカメラマンも含め6

人がアテネで取材していた。

悪条件は東京マイナス6時間という時差だった。国会審議や首相演説、大規模集会など、現地の深夜に事態が動くことは珍しくなかった。それを受け、EU側取材陣とも内容をすり合わせた上で記事を書く。夕刊用

に東京とやりとりをしている間に夜が明けてしまい、そのまま朝刊向けの取材に突入する。強い日差しの下、皆が連日そんな苦行を重ねた。

預金引き出し制限の対象は国内発行のカードのみで、クレジットカードも結局、ホテルなどでは使えなかった。私たちは資金繰りに困ることとはなかった。だが、現実には10ユーロ紙幣の不足も影響し、1日50ユーロ(約6800円)ずつしか下ろ



EU改革案の受け入れ賛成派の集会(6月30日)。7月5日の国民投票に向けて、アテネ中心部のシタグマ広場では連日、賛否両派が大規模集会を開いた(筆者撮影)

せないATMにじっと列を作っている地元の人に交じり、高額の現金を下ろすのは気がひけるし、安全ともいえない。クレジットカードが使えなくなるという万が一の事態も想定し、かなりの額のユーロを現金で携えての現地入りとなった。

ホテルは取材陣特需
ギリギリ確保した作業場所

経済が破綻に直面している中でも観光が基幹産業である実態に変わりはなく、アテネ市中心部のホテルは連日、満室状態。世界中からのメディア取材陣による特需がそれに拍車をかけた。このため、取材陣は分散宿泊、しかも頻繁な宿替えを余儀なくされ、作業スペースを確保するのも大変だった。定宿の一つのカフェで粘り続け、パソコンを広げて仕事をしていた私たちのことを大目に見てくれた、ギリシャ人従業員たちの優しさがありがたかった。

ユーロ離脱の危機はひとまず回避されたものの、事態は根本解決したわけではない。今後も現場の感覚を大切にしながら、チームワークで取材にあたりたい。

うめはら・としや▼1988年入社 長崎
 Winston など勤務後 国際報道部
 東京社会部デスクなどを経て 2013年8月からヨーロッパ総局長

新幹線焼身自殺・火災事件

津村 健夫(毎日放送)

4号車に乗り合わせ第一報
映像と電話で生リポート

6月30日、午前11時30分。東京発・新大阪行き「のぞみ225号」が新横浜駅を出てから、10分ほどたった頃だった。車内の乗客はパソコンでメールチェックをしたり、弁当の包みを開いて早めの昼食を取ったりと、いつもと何ら変わらない光景がそこにはあった。

しかし、「1号車、火災！」という非常アナウンスで状況は一変した。私が乗っていた4号車には、前の号車から乗客が続々と避難して行く。顔がすすけて真っ黒になっている人、切迫した表情で泣いている人もいる。一瞬、「自分も避難した方がいいのではないか」という考えが頭をよぎったが、避難してきた乗客の一人がこう言った。「1号車の前方で、男が自分で油のようなものをかぶって、焼身自殺を図った」

新幹線の車両自体に異常があつて火災が起きたのではない。その現場の消火さえできれば、後ろの号車まで延焼が及ぶことはないだろう…。



天井が溶け落ち、煙が充満した1号車内



車内でレポートする筆者(写真2枚とも毎日放送提供)

確証はないが、そう思い至った時点で、自分が避難するという選択肢は消えた。むしろ「史上初の新幹線車両火災」というニュースを取材する、というモードに頭が切り替わった。

伝送考え、スマホで動画撮影

「のぞみ225号」は、程なく緊急

急停車。私は前日からドキュメンタリー番組の取材で東京に出張し、カメラクルーと一緒に大阪に戻る途中だった。別の号車に乗っていた佐藤カメラマン(所属は放送映画製作所)と4号車で合流し、これ以後「カメラは現場を撮る」記者は目撃談を取ることにそれぞれ専念した。

佐藤カメラマンは、素材伝送のことも考え、通常のカメラではなくスマートフォンを使って、車内の火災現場の状況を動画撮影した。灰色の煙が充満した1号車内、通路を前進すると、現場となった前方のデッキ付近の座席が焼け焦げ、天井が溶け落ちて床までだらりと垂れ下がっている。その様子を、映像はしっかりと捉えていた。

私は自分のノートに車両の見取り図を描き、避難してきた乗客に「どこで何が起きたのか」を指し示してもらいながら、目撃談を取った。その結果、「身長150センチぐらいの男が、所持していたポリタンクに入っていた油のようなものをかぶり、自らライターで火をつけた」という概要に加え、「犯行前に、周囲の乗客に『逃げろ』と

言っていた」などの細かい情報も得ることができた。

12時30分には、キー局TBS発の情報ワイド番組「ひるおび」内での電話生リポートとスマートフォンで撮った現場映像による「第一報」にこぎ着けた。その後、新幹線車内↓小田原駅構内↓東京のTBSスタジオと場所は移動したが、「自分が最前線にいるのだから、見たこと、聞いたことをそのまま伝えればよい。それがニュース、それが仕事」という思いで終日リポートし続けた。

行き先なかった男に募るやりきれなさ

当日「のぞみ225号」に乗り合わせた人には、それぞれ「行き先」があつたはずだ。事件の巻き添えになり、亡くなった女性の乗客は「お伊勢参りに行く」と言つて家を出た。ただ一人、焼身自殺して事件を引き起こした70代の男だけは、年金制度への不満を周囲に語り、行き先を持たなかつた。大々的な報道の一方で、寂し過ぎるこの国の一面を見た気がして、やりきれなさが募る。

つむら・たけお▼1987年入社 ラジ
オ局制作部 報道局社会部を経て 20
01年から報道局番組センター

被災地通信³⁶ 福島県楢葉町

不安の中での 避難指示解除

円谷 真路 (福島民報社)

東京電力福島第一原発事故に伴う全町避難が続く福島県楢葉町の避難指示が、9月5日午前0時に解除される。近隣のいわき市など、県内外で約4年5カ月余りにわたり避難生活を送ってきた住民の帰還が始まる。だが、原発への不安や生活環境が整っていないことなどを理由に、解除後すぐに帰還する住民は少ないとみられている。町がかつての姿を取り戻すまでの道のりは長く険しい。

楢葉町は福島第一原発から半径20^キ圏内にほぼ全域が含まれ、警戒区域を経て避難指示解除準備区域に再編された。町全域で除染が施され、町役場の空間放射線量は毎時0・1

シーベルト程度で推移している。政府は当初、8月の盆前解除を提示した。「避難指示は、古里に帰りた」と思っている住民に対して強制的に避難を強いる措置」。政府担当者は避難区域の解除に消極的な住民が少なくない状況を踏まえ、こう強調した。

さらに、帰還困難区域以外を2017(平成29)年3月までに解除し、解除時期にかかわらず精神的賠償を30年3月まで支払うとした指針を閣議決定し理解を求めた。帰還後の生活再建を後押しし、解除への理解を促す狙いがあった。しかし、政府の思惑は外れた。

町議会、区長会、住民説明会で反対の声が相次ぐ。住民らは医療機関や商業施設など、帰還するための生活基盤が整っていないと訴えた。政



9月5日の解除を前にほとんどの部署が戻った楢葉町の本庁舎。住民帰還に向けた取り組みを加速させる(福島民報社提供)

府は7月6日、解除を1カ月程度先送りする方針を示し、町は了承した。町外の医療機関への通院バスの運行や飲料水の放射性物質検査の実施も併せて提示したが、住民には今も解除への不満がくすぶる。

生活基盤、放射線への懸念 古里を諦める人も

4月から避難指示解除に向けた準備宿泊が実施されている。登録者は全町民の1割弱の673人(6月7日現在)にとどまっている。60歳以上がほぼ半数を占める。町によると実際に宿泊しているのは100世帯程度だという。長期化する避難生活で、古里への思いは薄れたのか。

脆弱な社会基盤での生活再建を不安視する背景には、避難先の都市部での便利な生活との落差がある。「病院や商店が近くにある。仮設住宅で知り合った人との交流も大切にしたい」。自宅から約40^キ離れたいわき市に避難している無職男性(70)は当面、帰還しないと漏らす。

さらに、仮設・借り上げ住宅に無償で居住していられることが帰還の足を重くする。若い世代を中心に放射線や廃炉作業への不安も消えない。帰還を拒む子どもや孫との生活を維持するため、古里での暮らしを

諦めた高齢者もいる。

切れ目ない支援で 活気取り戻したい

楢葉町に隣接する広野町は福島第一原発から23^キ圏内にあり、11(平成23)年9月に緊急時避難準備区域が解除された。住民帰還が始まってから間もなく丸4年を迎える。全町民約5500人のうち、約3000人が古里に戻った。町は大型商業施設の誘致を決めるなど生活環境の充実に力を注ぐ。町の描く将来像がさらに住民の目に触れるようになれば、さらに帰還は進むとみられている。

避難区域には解除後も生活基盤の向上に向けた切れ目ない支援が欠かせない。商業施設や医療機関が整備され、利便さや安全・安心が実感できた時、住民は戻る。少しずつでも、かつての活気が生まれれば、ものにぎわいがまた人を呼び込むだろう。避難区域であるのを理由に、楢葉町への進出計画を棚上げにしていた企業もあると聞く。解除により企業が操業すれば雇用が生まれる。避難区域の復興は、解除によって、ようやくスタートラインに立つ。

つむらや・しんじ▼1991年入社 社会部 郡山本社などを経て 2015年4月からいわき支社報道部長・富岡支局長

私が会った
あの人

「曲がったことが大嫌い」を 地で生きた米原万里さん

金平 茂紀 (TBSテレビ)

テレビ報道を38年も続けてきて、人と会うのを仕事としてきたのだが、僕はどちらかといえば人と会うのが苦手な人間だった。けれども、否応なしに関わらざるを得ない人と巡り会い、そこから絶大な影響を被るといふ経験こそが人生の妙味だろう。

いきなり爺くさい書き出しになったが、そんな人物の一人が、米原万里さんだ。米原さんは2006年5月に56歳の若さで他界された。その年の七夕の日に、当紙の発行元、日本記者クラブの10階ホールで「米原万里さんを送る集い」が開催され、多くの人が故人を偲んだ。

界)から「お前、ロシア語を勉強するんだっつたらこの人に会ってみろ」と紹介されたのだ。米原さんは当時、TBSの宇宙プロジェクトの通訳兼コーディネーターとして、日本人初の宇宙飛行士・秋山豊寛さんをソ連のバイコヌール基地から飛ばすという計画に中心的に関わっていた。

とにかく万里さんは会った当時から輝いていた。小気味いいほど、ずけずけとものを言う。僕は彼女から紹介された代々木駅前、小さなロシア語教室で文字通りゼロからロシア語を学んだ。36歳から新しい外国語を学ぶというのは大変だったが、とにかく万里さんのまわりにいる人たちが個性派揃いで、楽しいのである。

その後、僕はモスクワに赴任したのだが、5カ月目にいきなりゴルバチョフが軟禁される保守派クーデター事件が起きた。ソ連崩壊の直接の引き金になった大事件だったが、万

里さんは、僕の前任者の小池敏夫さんと共に、すぐにモスクワに駆けつけてきてくれ、以降、不眠不休でクーデター事件の推移を時々刻々と報じた。ロシア語の同時通訳者の第一人者だった万里さんは、ロシア側からも絶大な信頼を得ていて、何と

その夏に、僕らモスクワ支局は、エリツィン、ゴルバチョフと事件の主人公たちの単独インタビューを次々にもものすることになった。もちろん通訳は万里さんが務めたが、交渉を行ったのも万里さんである。

今だから明かすのだが、ある日、万里さんがTBSのモスクワ支局で冗談とも本気ともつかない表情で「私を支局で雇いなさい」と言ったことがあった。どきまぎした。その後、万里さんは、そんなことは二度



JNNモスクワ支局で同時通訳中の米原万里さん(右)。左から筆者と小池前支局長(1991年夏/筆者提供)

と口にしなかったが。万里さんはその後、作家として作品をどんどん発表し、同時通訳で仕事を共にする機会は減ったが、さまざまな折に本音で話をした。彼女は曲がったことが大嫌いで、そのモットーを自分の生活でも実践していたようなところがあった。

僕がワシントン支局に赴任していた時、イラク戦争に絡み、日本人質事件が発生した。その時、日本国内では人質やその家族に対していわゆる「自己責任」論を盾に、バッシングの嵐が吹き荒れた。ワシントンと鎌倉で長い時間、万里さんと僕は電話で話をした。その時の内容が拙著『テレビニュースは終わらない』(集英社新書)に収録されている。

あれから10年以上の歳月が流れた。「イスラム国」による邦人人質殺害事件が起きた。万里さんが生きていたら、怒りのあまり憤死していただろう。メディアの報道ぶりに、政府の対応に。(かねひらしげのり「報道特集」キャスター)

次号は高峰武さん(熊本日日新聞)にバトンが渡ります。

36
記者ゼミ



テレビ局の ネットメディア マネタイズを模索

同時に、地上波とほぼ同じ基準で情報を提供することで信頼性を担保したり、専門的な知識を持つ記者らを起用して長時間の解説番組に仕立てた

24時間放送のニュース専門局「ホウドウキョク」。

ふくはら 福原 伸治
フジテレビジョン報道局長次長、
「ホウドウキョク」プロジェクトリーダー

「ニュースの入り口と出口を広げること、ニュースの在り方を変えたい」と語る。

モバイル端末の登場で、ユーザーは好きな場所・時間に、好きな端末で情報を受け取り、発信するようになった。こうした変化に合わせ、ホウドウキョクでは視聴者とのコミュニケーションを重視したSNS的なコンテンツや、インターネット上で話題になっている事柄を取り上げることなどに力を入れているという。今後はアプリをリリースし、多くの番組をホウドウキョクに集めることで、双方向性を持つ「よりネットに近い」メディアにしていく構想だ。

りと、既存のインフラを活用する工夫も紹介された。

専属社員7人、制作スタッフ45人にネットメディアからの転職組はいない。新しい試みと従来の強みの組み合わせは、他のマスメディアにとって参考になるだろう。

ホウドウキョクは、番組のおよそ半分が無料で視聴でき、それ以外は有料だ。今後のマネタイズについては、動画広告やさまざまな方法の課金を取り入れていきたいという。インターネットでのニュースメディアのビジネスモデルは、絶対的な成功例がまだなく、世界中で模索が続いている。「これが成功だとは思っていない。(メディアとして)体力があるうちに、できることをやった方がいい」との言葉に、うなずく人は多いのではないのか。

共同通信デジタル推進局デジタル事業部
飯塚 麻代

6・26(金)「変わるテレビ放送」/司会:橋場義之特別企画委員/出席:参加38人+ネット視聴11人

37
記者ゼミ



欧州メディア 紙とデジタルの融合 編集局の統合進む

「デジタルファースト」を唱えていたが、しばらく紙の編集が優先されていた。デジタルに先に出稿してから紙を編集するという流れが強まり、12年に編集局が

こばやし 小林 恭子
在英ジャーナリスト

「新聞研究」などで欧州のメディア事情を定期的に発信する小林恭子さんを講師に迎え、紙とデジタルの融合の象徴である編集局(ニュースルーム)の変化がテーマとなった。

欧州各国の大手メディアでは、紙とデジタルの編集局が統合され、Integrated Newsroomが次々に生まれている。ネットの読者が増え、24時間対応が必要なデジタル編集部門の拡充が迫られ、その結果、既存の編集部門との共存やすみ分けが求められるという背景がある、と語る。

実例として示されたのは、ドイツのアクセル・シュプリンガー(A.S.)社とイタリアの日刊ラ・スタンプ紙。非英語メディアの取り組みは日本にとってより参考になると思われる。

このうちA.S.社は、高級紙ヴェルトや大衆紙ビルトなどを発行する欧州有数のメディアコンゲロマリット。2002年からデジタル化を進め、

統合された。現在、120人の編集制作スタッフが紙とデジタルの両方を編集。インフォグラフィなどはデジタルのものを紙に流用している。

ラ・スタンプも含め、記者は全員がツイッターを使い、ソーシャルメディアからの流入増をめざす。また若者メディアにも力を入れる。一方で共に人員削減などを実施し、デジタル時代に適応できない人には去ってもらおう冷徹な現実もあるようだ。

質疑応答では「デジタル優先で紙面の質は落ちないか」「紙への特ダネ優先はあるのか」など日本の現状を踏まえた質問が相次いだ。デジタルに限らない幅広い情報を講師から提供していただき、米国に比べ、あまり知られていない欧州メディアの現状を多く学ぶ貴重な機会となった。朝日新聞ソーシャルメディア・エディター
藤谷 健

7・3(金)「変わる編集局—Integrated Newsroomとは」/司会:橋場義之特別企画委員/出席:参加35人+ネット視聴16人



効率的な情報収集 連絡手段に ネットを活用

「インターネットの活用に裏技はない。自分の欲しい情報に効率よくたどり着くことに尽きる」。紙媒体を主とする新聞業界にとって、インターネットは、速報性という点でもニュースを伝える新しいメディアとして注目

度は高い。このネットを取材でも活用しようというのが、今回の記者ゼミの主題だ。あくまでインタビュを基本とする取材のスタンスは変わらないものの、情報収集やコミュニケーションツールとして利用する価値は高そうだ。

平氏は主に「ツイッター」と「グーグル」の活用について説明した。ツイッターを使用し、電話番号、住所、メールアドレスが分からない取材対象者との連絡手段に使用した実例を紹介。グーグルは政府関係の「google.jp」のドメイン名や、「pdf」の指定により、政府発表の紙ベースの資料の効率的な収集に役立つことな

どを紹介した。

ツイッター上にアップされた画像を新聞などで使用することにも言及。画像を検証する必要性などはあるもの

の、「ほかに連絡手段がなかったり、カメラマンが現場に立ち会えなかったりする状況はあり得る。一般の人が撮影した発生当時の写真は歴史的な資料になることもあり、報道する価値はある」と指摘した。

「取材活動では常にアンテナを高くしろ」。駆け出しのころに先輩記者から何度も言われた言葉だ。今後ともソーシャルメディア分野の拡大傾向が続く中、ネット上での情報収集は欠かせない。ただ、人対人、現場主義という報道の原点は変わらない。取材先で「ちょっとお茶でも」と誘われ、雑談の中でニュースのヒントを得ることも多い。新聞社としてはより良い紙面を読者に届けることが最重要課題。多様なツールを駆使し、今後も取材活動を続けていくことが大切だとあらためて感じた。

山形新聞報道部主任 近岡 国史

7・17(金)「変わる取材—ネット活用」
／司会・橋場義之特別企画委員／出席..
参加20人＋ネット視聴9人

「変わる」シリーズ最終回は9月25日

10月からは「ミレニアル世代」をテーマに第3期記者ゼミ「次世代ジャーナリズムの現場—その原則とスキル」は、7月17日(金)に第5回「変わる取材—ネット活用」講師・平和博さん(朝日新聞)を開催し、夏休み前のスケジュールを予定どおり終了しました。次回は、「変わる表現と記者の条件」をテーマに夏休み明けの9月25日(金)に再開します。中日新聞電子編集部編集部の松波功さんに最新のデジタル技術を駆使した表現のスキルを紹介していただき、ネット時代に求められる資質など新しい記者の条件を考えます。

「変わる」シリーズで開幕した第1回から5回までは、社会・通信社・テレビ・編集局・取材といった切り

口でそれぞれの変化を見てきました。各回の参加者は平均42人、うちネット同時視聴も平均10人と定着してきました。講師のお話の後の約1時間の質疑も充実し、終了後の講師との懇親会でも熱心な議論が続けられました。

第7回以降は、モバイルを中心に情報に接している若者像をどう捉えるかがテーマ。「ミレニアル世代と向き合う」と題して、「スマートニュース」の藤村厚夫さん、東大情報学環教授の橋元良明さんらを講師にお迎えする予定です。

特別企画委員 橋場義之
記者ゼミでは参加者を募集しています。対象は日本記者クラブ会員の現役記者です。登録希望の方は seminar@jpcor.jp へご連絡ください。

<理事交代>

- ▶ 沖縄タイムス社
具志堅毅東京支社長(旧・比嘉敏幸)
- ▶ 日本プレスセンター
西野文章専務取締役(旧・梅田光男)

<法人会員代表変更>

- ▶ スポーツニッポン新聞社
河野俊史代表取締役社長(旧・森戸幸生)
- ▶ 上毛新聞社
北村幸雄代表取締役社長(旧・渡辺幸男)
- ▶ AFP通信社
HYZY, URSULA東京支局長(旧・LHULLERY, JACQUES)
- ▶ ビーエスフジ
宮内正喜代表取締役社長(旧・北林由孝)
- ▶ 高知放送
佐竹慶生代表取締役社長(旧・山本邦義)
- ▶ 福岡放送
毛利元夫執行役員報道局長(旧・三沢明彦)
- ▶ NHKグローバルメディアサービス
石田研一代表取締役社長(旧・藤森隆行)

三船敏郎が阿南惟幾これちか陸相役を務めた同名の前作（1967年、東宝）を見た記憶はあるが、細部までは覚えていない。阿南惟茂・元中国大使（陸相の六男）は、筆者が政治記者時代の取材対象でもあったので、今回の松竹120周年記念作品でも役所広司の阿南役に視線が行きがちだった。



試写室 (7.10) 日本のいちばん長い日

この映画のヤマ場は3つある。「昭和天皇の聖断」「玉音放送」「若手将校の反乱」。ポツダム宣言を受託するかどうかで合意できない鈴木貫太郎（山崎努）内閣は、昭和天皇（本木雅弘）のご聖断を仰ぎ、「このまま戦争を継続することは私の望むところではない」とのご決断を引き出してい

「聖断」の意味合いを重視 戦後70年にふさわしい作品

宇治 敏彦（中日新聞社相談役）

く。大元帥の意向に沿うべく鈴木首相はもとより、阿南陸相も心を鬼にして本土決戦を唱える将校たちを叩いていく。

半藤一利氏の『日本のいちばん長い日 決定版』（1965年の初版当時は大宅壮一名で発表）を映画化した原田真人監督は、今回の製作意図について「昭和天皇が語られた一言一言が今を生きる自分の心に深く突き刺さる」とコメントしている。英語名を「THE EMPEROR IN AUGUST」とした所以だろう。

昭和天皇、鈴木首相、阿南陸相の三者が心の中で深く繋がっていたからこそ陸軍の本土決戦論、若手将校の決死の反乱を抑え込めたのだろう。阿南の娘の結婚式を気遣う昭和天皇や鈴木首相に葉巻を贈る阿南の姿に鈴木が「阿南君はいとまごいに来てくれたんだね」と語るシーンは、そうした結束ぶりを裏付けている。それにしても当時の切羽詰まった状況下の興奮ぶり、緊張、ある意味では狂気ともいえる兵士たちの気持ち、現在の若者たちにどこまで伝わるだろうか。

東條英機元首相が若手将校たちを前に徹底抗戦を唱える場面で、「天皇陛下におかれては」というたびに、若手将校たちがピリッと直立不動の姿勢をとる。終戦時に小学校（当時は国民学校）2年生だった筆者には、学校での「天皇、皇后の御真影への拝礼」「皇居遙拝」といえば姿勢を正したものが、さて現代っ子たちが、この映画をどう見るのか、感想を聞いてみたい。

筆者も最近、『政の言葉から読み解く戦後70年』という本を上梓したが、この節目の年に「日本のいちばん長い日」が上映される意味は大きい。宮内庁に保管されてきた「玉音放送」（戦争終結の詔書）の録音レコード盤5枚（4分30秒）が8月1日に初公開された。70年前に必死でこれを奪おうとした若手将校たち。彼らもまた「愛国者」であったに違いないが、その愛国心は冷静・客観的に考えてみると、何か大きな狂気に振り回されていたものではなかったろうか。無謀な戦争に突っ込んでいった当時の指導者たちの判断と責任を検証し、この映画が、そうした事態を再来させないための「教材」になることを願ってやまない。

©2015「日本のいちばん長い日」製作委員会
全国上映中

■会議報告

●第365回会報委員会

（7・8 小会議室）
8、9月号の編集について協議した。
出席 飯塚委員長、稲沢、鈴木、渡辺、向山、佐塚、大寺、長崎、藤井、藤澤の各委員。

●第455回会員資格委員会

（7・16 小会議室）
8月1日付入会を審議し、理事会に答申した。
出席 小田委員長、齋藤、新堀、播摩、畑山、山本、國府の各委員。

●第454回企画委員会

（7・21 会見場）
今後のゲスト候補や研究会テーマについて協議した。
出席 西村委員長、星、倉重、福本、橋本、秦野、宮田、榊原、杉田、軽部、加藤、山本、瀬口、原田、宇留間、島田、竹田、山崎、川戸、杉尾、小栗、川村、三反園、和田、堀、橋場の各委員。

●第218回施設運営委員会

（7・28 小会議室）
5、6月のアラスカ売り上げと貸室利用状況について事務局が報告した。
出席 西淵委員長、野村、竹内、須賀、須田、林、吉澤、富田、羽原の各委員。

●第571回理事会（書面）

別掲（23頁）の役員の一部交代を了承した。

マイBOOK
マイPR

■芥川賞の謎を解く 全選評完全読破

鶴飼 哲夫 (読売新聞編集委員)

激論選考会の舞台裏を明かす 人気芸人・又吉直樹さんの『火花』の受賞で、創設80年の芥川賞が熱い。「新人の登竜門」に過ぎない賞がなぜ、これほど注目されるのか。それは「新しい文学」を巡って作家同士が真剣勝負で激論を交わしてきたからだ。第1回芥川賞に落ち、選評に激怒して川端康成を「大悪党」と罵った太宰治、話題作『エーゲ海に捧ぐ』の受賞に断固反対し「戦死」を宣言、委員を辞めた永井龍男……。火花散る選考の舞台裏を全選評を読み、解明しました。



文春新書 896円

■諜報の現代史と政治行動としての情報戦争

植田 樹 (NHK出身)

情報と政治を考察 「見ざる、言わざる、聴かざる」は個人にとっては安楽であっても国家にとってはどうか。情報は生き残るためには必須の要件ではないか。情報の収集や防衛

を政治の延長線上でとりあげた。「スパイは生きている」では近年のスパイ事件をめぐる水面下の政治駆け引き。「政治権力と謀略」ではロシアの国内政治と情報機関の暗闘。「国家権力と情報機関」ではKGBとその継承組織、CIA、FBI、MI6など各国の機関の歴史や組織、活動の概略。「狩りと罠(わな)」では日本を舞台にした事件や

各国機関の暗殺や謀略、攻防の実態。「情報戦争の行方」では国家機密と内部告発、情報産業の繁栄、始まっているサイバー戦争、中国のサイバー戦略などをとりあげている。



彩流社 3780円

■新聞のある町 地域ジャーナリズムの研究

四方 洋 (毎日新聞出身)

地域紙の灯を絶やすな 2年間にわたって地域紙26社(対談を含む)を訪ねました。北は十勝毎日、南は八重山毎日まで。在り方は様々ではありませんが、共通しているのは地域密着を徹底していること。アメリカではコミュニティペーパーが盛んで、記者活動もここからスタートするときあります。日本では全国紙、地

方(県)紙の力が強く、地域紙は減少傾向です。放っておけばどんどん消えていきそう。灯を絶やしてならないとの思いで全国を歩きました。空白地区は多くあります。「地域紙よ おこれ」の叫びをきいてください。



清水弘文堂書房 1620円

■満蒙開拓、夢はるかなりー加藤完治と東宮鐵男(上・下)

牧 久 (日本経済新聞出身)

開拓の父2人が描いた夢 敗戦の年の夏、ソ満国境を越えて侵攻してきたソ連軍によって、日本人開拓団8万人が命を失い、4千人を超える残留孤児が生まれた。北満の未墾の曠野に鉄を振るい、豊かな農村建設を夢見た農民に、なぜこれほどの犠牲者がでたのか。彼らは戦後「中国侵略の先兵」として否定され続けた。戦前、戦中に「満蒙開拓の父」と呼ばれた2人の人物(農本主義教育者・加藤完治と軍人・東宮鐵男)を通して、日本人の満蒙開拓の真実に迫る。加藤、東宮両家から戦後、歴史の底に沈んでいた貴重な資料の提供を受けた。



ウェッジ 各1728円

■世界のエリートは人前で話す力をどう身につけるか?

赤阪 清隆 (フォーリン・プレスセンター理事長)

話し上手への工夫やコツ伝授 日本では、「話す力」よりも「聞く力」のほうが大事なせいか、人前で話すのが苦手な人が断然多数です。人前で上手に話すための学習や訓練も十分ではありません。競争が激化するここからの世界で、話し下手では、就活や、ビジネス、学究、メディアの世界などで大きなチャンスをもてできないでしょう。幸い、私は外交官、国際公務員としての長い海外生活を通じて、世界の素晴らしい話し上手を身近に観察する機会に恵まれました。クリントン夫妻などいろいろな工夫を凝らしています。そうした工夫やコツをこの本でお教えします。



河出書房新社 1404円

原稿をお寄せください

会員の皆さまが出版された本を「マイBOOKマイPR」でご紹介します。200字程度で内容や狙いをおまとめください。お問い合わせは下記の担当者まで。
担当：村田
電話：03-3503-2729
メール：murata@jnpc.or.jp

過去の戦後企画 ウェブサイトで読めます

会報に掲載してきた戦後企画を、クラブのウェブサイトでご覧いただけます。トップページの「活動」から「会報」を選んでください。プリントアウトして読むこともできます。

■戦後45年

- ・1990年9月号 13P
- ①“あの旗に会いたい”終戦45年目の従軍記者
山崎英祐・読売新聞ラバウル特派員

■戦後50年

- ・1995年8月号 4～7P
- 記者たちの8月15日
- ①地下壕の編集局 陣中新聞を発行
山崎英祐氏
- ②欧米部別室 トイレット通信社
渡辺善一郎・毎日新聞欧米部記者
- ③従軍カメラマン 北京で玉音放送きく
西井武好・同盟通信写真部記者
- ④ポツダム宣言受諾 公使が特派員を集める
佐々木凛一・同盟通信ストックホルム支局
- ・同9月号 4～5P
- ⑤チロル山中に脱出 最後の特派員電打つ
江尻進・同盟通信ベルリン特派員
- ⑥支局は外電傍受基地 現地召集され終戦に
枝松茂之・毎日新聞広東支局長
- ・同10月号 13P
- ⑦ミズーリ号取材 同盟最後の仕事だった
西山武典氏・共同通信出身

■戦後60年

- ・2005年8月号 14～16P
- ①私の従軍記 南方、北千島、中国戦線 愛
機はパルモス、ライカ、バルダックス
西井武好氏
- ・同11月号 8～10P
- ②モンテンルパ、ベトナム、そして中国
中俣富三郎・中日新聞・東京新聞北京特派員
- ・同12月号 12～13P
- ③同盟マカッサル支社局～苦難に満ちた3年
間～
内田啓明・同盟通信記者

情報発信

■市川隆太記者遺稿集 出版記念会

中日新聞北陸本社報道部長だった2014年7月、脳出血のため54歳で死去した市川氏を偲ぶとともに、仲間たちによる遺稿集『番犬の流儀 東京新聞記者・市川隆太の仕事』(明石書店)の出版記念会が開かれた。(7.10 10階ホール)

■国民安保法制懇 緊急記者会見

同会は憲法や安全保障の専門家で構成されている。会見には早大教授の長谷部恭男氏、元内閣法制局長官の大森政輔氏、東大名誉教授の樋口陽一氏ら7人が登壇、集团的自衛権の行使容認は違憲だなどとして、安保法案の廃案を求めた。(7.13 会見場)

新しいOB会員

■ 粕谷 卓志 1976年朝日新聞入社。社会部、東京社会部長、編集局長、編集担当など。テレビ朝日常務を経て現在、テレビ朝日ミュージック会長。



新聞・テレビで39年生きてきました。職場・環境変われども、生涯「記者」、とりわけ「事件記者」であり続けたいと思っています。

■ 鳥居 元吉 1969年日本新聞協会入社。理事・事務局長、専務理事、顧問を務め2015年6月退職。



会員各社との交流、マスコミ界の動向、時事問題など見続けていきたい。

■ 松野 哲朗 1985年日本経済新聞入社。マニラ支局長、経済解説部、産業地域研究所など。2015年6月退社。



ラテンアメリカ経済に魅力を感じ、早期退職の道を選びました。大学院で学んだ後、フリーとしてゼロから出発します。

■ 村上 直久 1975年時事通信入社。米UPI通信出向、ブリュッセル特派員など。2001年に退社後、15年3月まで長岡技術科学大学に務め、現在、ニッポンドットコム・シニアライター。



26年間の記者生活、その後14年間の地方大学教師稼業を経て、(自称)フリージャーナリストとして再出発しました。

■ 吉田 弘之 1980年毎日新聞入社。外信部長、編集局次長、新聞研究本部長を務め2015年退社。現在、同社客員編集委員、アジア調査会常務理事・事務局長。



一線で活躍する専門家や話題の当事者の話を聞けるのが日本記者クラブの魅力です。自己研鑽の場として活用させていただきます。

HP更新情報

■ 会見詳録 会見の全文文字記録版

● シリーズ企画「戦後70年 語る・問う」⑱
「私の戦後70年、ゾルゲの場合」篠田正浩・映画監督(2015.6.1)

● ベニグノ・アキノ・フィリピン大統領記者会見(和文・英文)(2015.6.5)

■ 音声アーカイブ(日付は会見日)重要会見の音声録音

- 宇野宗佑 外相(1988.6.10)
- 小渕恵三 官房長官(1988.8.26)
- 李鵬 中国首相(1989.4.14)
- 盧泰愚 韓国大統領(1990.5.26)
- アンジェイ・ワイダ 映画監督(1992.10.23)
- イチロー プロ野球選手(1994.11.4)

*「音声アーカイブ」へは、クラブウェブサイトからアクセスできます。

<http://www.jnpc.or.jp/>

レストラン* 価格は全て税込です

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 鱧懐石(9/4まで)

先付：豆乳豆腐 刺身：鮪、勘八、鱧湯引き
鍋：鱧しゃぶしゃぶ、水菜、長ねぎなど 揚物：
鱧天ぷら 食事：鱧ご飯 水菓子：季節の果物
グラス冷酒付き(4,860円) (板長：大井由光)

洋食 シチュードビーフコース(9/5まで)

スズキのカルパッチョ サラダ仕立て、ヴィシ
ソワーズ、シチュードビーフ デミグラスソース、
シャーベット、パン、コーヒー付き(3,780円)。ラン
チ、ディナー(土曜日はランチのみ9階レスト
ラン)ともにご利用いただけます。(シェフ：黒須修一)

**レストラン・アラスカ 夜の半額サービス
8月31日(月)まで**

毎年恒例のアラスカ半額サービスを今年も行いま
す。期間中はディナータイムの一般メニューを全て
半額で提供します。ご家族や友人との会食にぜひご
利用ください。ご予約(03-3503-2766)をお願いし
ます。

会員社ホール | イベント | 情報 |

浜離宮朝日ホール▶山崎伸子 チェロ・リサイタル with 加藤洋之(ピアノ) 2007年に始まり10年におよぶ「チェロ・ソナタ・シリーズ」の第9回。バッハの無伴奏チェロ組曲第3番、ショパンのチェロ・ソナタなどの名作を届けます。11/20(金)19時(一般4,000円 学生2,000円)●03-3267-9990

日経ホール▶シャンドル&アダム・ヤボルカイ兄弟 with モーツァルトハウス・ウィーン弦楽四重奏団 「ウィーン・アーティスト・オブ・ザ・イヤー」にも選ばれた二人組が、彼らのカルテットを連れて来日。モーツァルトハウスゆかりの四重奏曲と、兄弟の超絶技巧をお聴き逃しなく。9/29(火)18時半(3,800円)●03-3943-7066

サントリーホール▶サントリーホールフェスティバル2015 オープニング・フェスターSounds カーニバルー 2011年にスタートした秋のクラシックの祭典。オーケストラをはじめ、さまざまなアーティストが集います。お祭りの華やかな幕開けをぜひお楽しみください。10/3(土)18時(10,000~26,000円)●0570-55-0017

王子ホール▶銀座ぶらっとコンサート#100 平田耕治 タンゴ四重奏 人気の「銀座ぶらっとコンサート」がついに100回目を迎えます。この記念すべきステージに登場するのはバンドネオンの鬼才、平田耕治と凄腕の仲間たち。情熱と哀愁をはらむ音色に魅了されること請け合いです。8/26(水)13時半(2,800円)●03-3567-9990

クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン(9階)..... ☎3503-2723 ●会員事務..... ☎3503-2727
- 洋食レストラン(10階)..... ☎3503-2766 ●経 理..... ☎3503-2728
- 貸室予約・宴会打ち合わせ・ ☎3503-2724 ●クラブ行事への申し込み..... ☎3503-2722
- 受 付..... ☎3503-2721 ●会見申し込みアドレス..... kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

- 法人会員：136社 ●基本会員：748人 ●個人会員：1,364人
- 法人・個人賛助会員：61社・138人 ●特別賛助会員：96人
- 名誉・功勞会員：12人 ●学生会員：126人 計：197社・2,484人

10階ホール天井の工事が始まりました

7月27日から8月25日までの予定で、10階ホール天井部分の耐震化工事が始まりました。この期間中、ラウンジから直接10階へつながる階段は使用できません。ご迷惑をおかけしますがご理解ください。

犬養康彦・元クラブ副理事長が死去

元共同通信社長の犬養康彦会員(87歳)が7月12日、虚血性心疾患のため死去されました。

犬養氏は1986年理事に就任、施設運営、総務各委員長を経て、88年から91年まで副理事長を務めました。

クラブ史に残るゴルバチョフ・ソ連大統領の深夜会見(91.4.19)を司会者として仕切られましたが、到着予定が遅れに遅れ午前0時半スタートという異例の会見が実現したのも、「何時になってもやろう」という犬養副理事長の強い決意によるものでした。心からご冥福をお祈りいたします。

<訃報>

鈴木沙雄会員(朝日新聞出身、87歳)が4月24日、小林樹会員(テレビ朝日出生、79歳)が7月8日、同15日には鶴木眞会員(東京大学名誉教授、72歳)と森田昌芳会員(中日新聞出身、84歳)が死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

■今号は「書いた話・書かなかった話」を休載しました。ご了承ください。

■小橋敏文・経理担当が退職しました■

事務局の小橋敏文経理担当(61)が7月30日付で退職しました。1980年3月、フロアマネジャーとして採用され、86年に経理担当に。以来30年近く事務局の“金庫”を預かってきました。陰日なたの黙々とした仕事ぶりには、同僚として頭が下がる思いでした。

「ゴルフの会」の世話役も30年務めました。コンペ当日は3時間前にコース会場に到着して準備にあたっていたそうです。同会は103回を数えています。初代事務局長の前田雄二さんが始めた「ゴルフの会」の伝統を絶やさないうえ、新しい方々の勧誘にも努めた小橋さんに対して、同会会員の方々から「親身になって世話をしていた」とねぎらいの言葉がありました。

(長谷川和子)

会報委員会

- 委員長=飯塚 浩彦
- 委員=稲沢 裕子 大寺 廣幸 佐塚 正樹
- 鈴木 仁 高橋 茂 長崎 和夫
- 藤井 良広 藤澤 秀敏 向山 明生
- 渡辺 大祐

(事務局：長谷川和子 村田 茜)

☎03-3503-2752 FAX 03-3503-7271

撮影：早坂 洋祐 (産経新聞東京本社写真報道局)



「玉砕の島」硫黄島。火山活動による隆起で姿を現した、米軍の船の残骸が点在する(中央)。奥は摺鉢山
= 6月12日、東京都小笠原村

どの「戦後」なのか

京都の人が「前の戦争」と言えば応仁の乱——はさておき、子供のころ郷里に背筋がピンと伸びたお爺さんがいた。日露戦争で騎兵だったとか。米俵を両脚で挟んで運ぶ筋力特訓のことなど、周囲に話していた。あの老人の「前の戦争」だったのだろうか。

この夏は、安倍談話で騒がしい。戦後50年の村山談話、同60年の小泉談話をどう引き継ぐかに関心が集まる。半世紀は確かに節目だ。60年も「還暦」と言うとおりに千支が一周する節目。70年は、はて。

確かに外も騒がしく、ロシアは5月9日の対独戦勝70周年記念日に、モスクワの赤の広場でソ連崩壊以来最大の軍事パレードを挙行了した。壇上にプーチン大統領と、習近平・中国国家主席が肩を並べた。同じ2ショットが、9月3日に北京の天安門広場で見られるはずだ。対日戦勝70周年の盛大な軍事パレードが予定される。中国とロシアが「世界反ファシズム戦争」の戦勝を派手に祝うのは、もう一つの戦後、「冷戦後」をややむやにする魂胆ではないか。

冷戦は、民主主義と市場経済を兼ね備えた「西側」が勝った。ロシアはこの15年、同じ人が権力を一手にし、中国は共産党一党独裁を死守する構え。ともに人権や、言論の自由や、法の支配に背を向ける。一方はウクライナ、もう一方は南シナ海で「力による現状変更」を企て、国際社会の冷たい視線にさらされている。いや、われこそは大戦の勝者にして戦後秩序の勸進元と、声高に名乗る動機がそこにある。そんな時節の首相談話、余計な口実を与えぬよう、あまり力まない方がよい。

(土谷 英夫)